日本美術史概說

第五册

藤原時代

黑田鵬心著

東京趣味普及會發行

549-63
帝國圖書館藏

例言

一　此の「日本美術史概説」はパンフレットとして、次の十册に分つて出すつもりである。

第一册　序説及原始時代	第二册　飛鳥及白鳳時代
第三册　天平時代	第四册　弘仁時代
第五册　藤原時代	第六册　鎌倉時代
第七册　室町時代	第八册　桃山時代
第九册　江戸時代	第十册　明治大正時代

一　毎册の頁數は一定しないが、先づ五十頁から百頁までとし、隔月一册出して、明年中に完成せしめる豫定である。

一　常識としての日本美術史が本書の目的である、普通の日本人として、此の位の日本美術の知識は持つて貰ひたいと思ふ。

昭和二・一〇・十・内交

第五册發刊に際して

此の第五册「藤原時代」は、第四册「弘仁時代」に引續いて三月發刊の豫定で、二月には既に原稿の半ばまで出來てゐたのであるが、其の後、第六回佛展を東京、大阪新潟、仙臺、札幌等で催し日佛藝術社の仕事で寸暇なく、又六月末からは「世界美術全集」の編輯に關係する事になつたので、其の方にも時間をとられ、つひに今日となた事は、度々問合せられた多くの讀者に對して誠に相濟まない次第である。これからは勉强して、精確に二ヶ月に一册づゝ出し、來年夏までには完成したいと思つてゐる。

昭和二年八月末

青山居にて

鵬心生

日本美術史概說第四冊　藤原時代目次

第六章　藤初時代

一　時代の大勢……二五七

概觀(二五七)――藤原氏の擅權(二五八)――佛教の特色(二六〇)――淨土教の勃興(二六二)――本地垂跡說(二六四)――文學(二六五)

二　建築……二六七

概觀(二六七)――神社建築(二六八)――神社建築の遺物(二六九)――住宅建築(二七〇)――佛教建築(二七三)――法成寺と法勝寺(二七五)――醍醐寺五重塔(二七六)――平等院鳳凰堂(二七八)――法界寺阿彌陀堂(二八三)――其他の遺物(二八五)

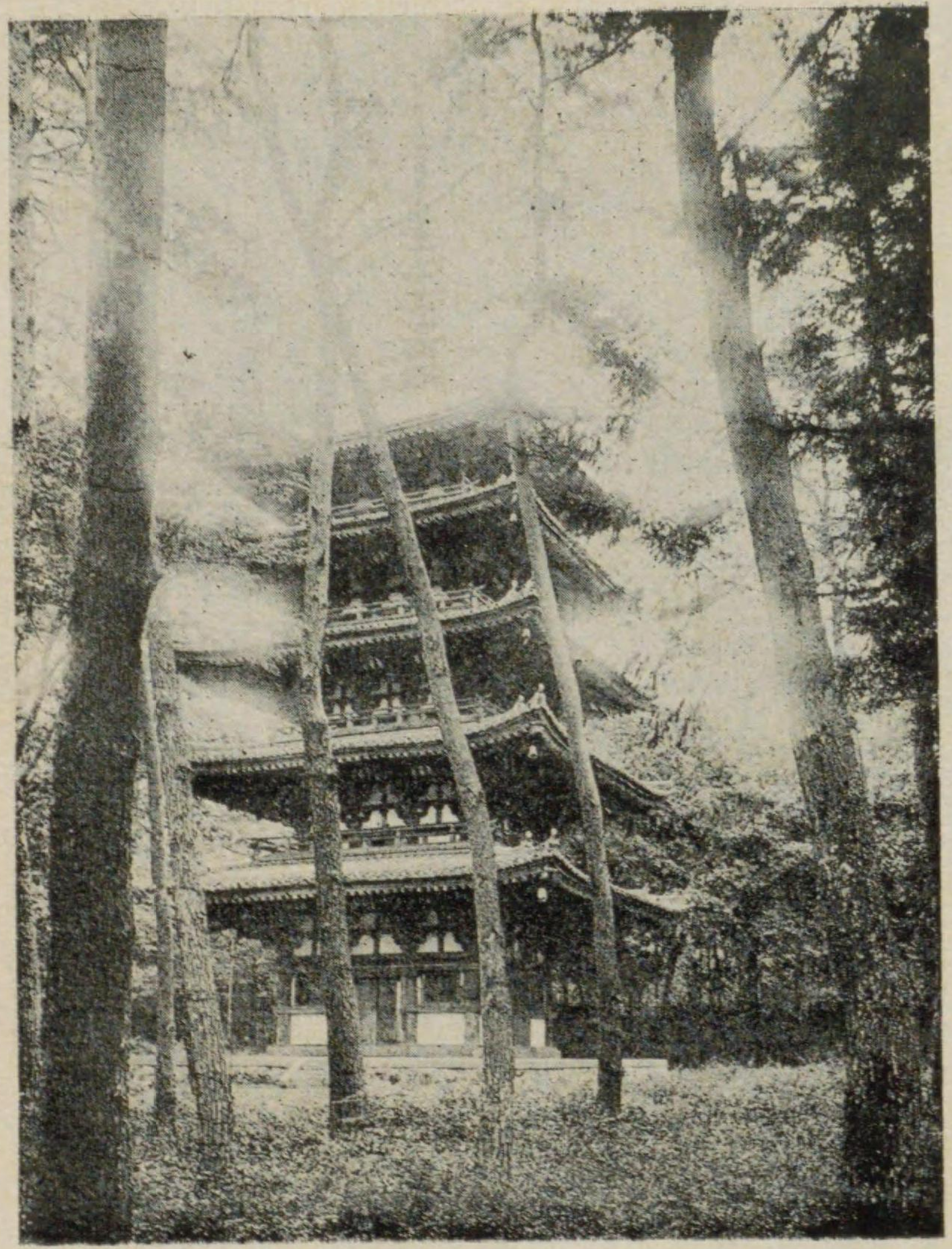
三　彫刻……二八八

概觀(二八八)――主なる彫刻家(二八九)――醍醐寺の諸佛像(二九〇)――法隆寺の諸佛像(二九一)――鳳凰堂の諸佛像(二九三)――淨瑠璃寺の諸佛像(二九三)――其他の遺物(二九五)――神像と肖像(二九八)

四　繪　畫……二九九
概觀（二九九）―主なる畫家（三〇〇）―壁畫の遺物（三〇一）―高野山聖衆來迎圖（三〇三）―其他の遺物（三〇四）
五　工藝美術……三〇七
概觀（三〇七）―鳳凰堂の遺物（三〇八）―其他の遺物（三〇九）
六　藤初美術の特色と價値……三一〇
四種の特色（三一〇）―同化時代の價値（三一一）

第七章　藤末時代

一　時代の大勢……三一七
概觀（三一七）―源氏と平氏（三一八）―陸奥藤原氏の豪奢（三一八）―佛教（三一九）―文學（三二一）
二　建　築……三二二
概觀（三二二）―嚴島神社（三二三）―神社建築遺物（三二六）―佛教建築（三二八）―中尊寺毛越寺其他（三二九）―金色堂と經藏（三三一）―其他の遺物（三三六）
三　彫　刻……三四一
概觀（三四一）―主なる彫刻家（三四一）―佛教遺物（三四三）―神像と肖像（三四九）―大分の石佛（三四八）
四　繪　畫……三五〇
概觀（三五〇）―主なる畫家（三五一）―佛畫遺物（三五三）―繪卷遺物（三五六）
五　工藝美術……三五八
概觀（三五八）―中尊寺の遺物（三五九）―其他の遺物（三六一）
六　藤末美術の特色と價値……三六一
特色ある繪畫（三六一）―獨創的の價値（三六二）

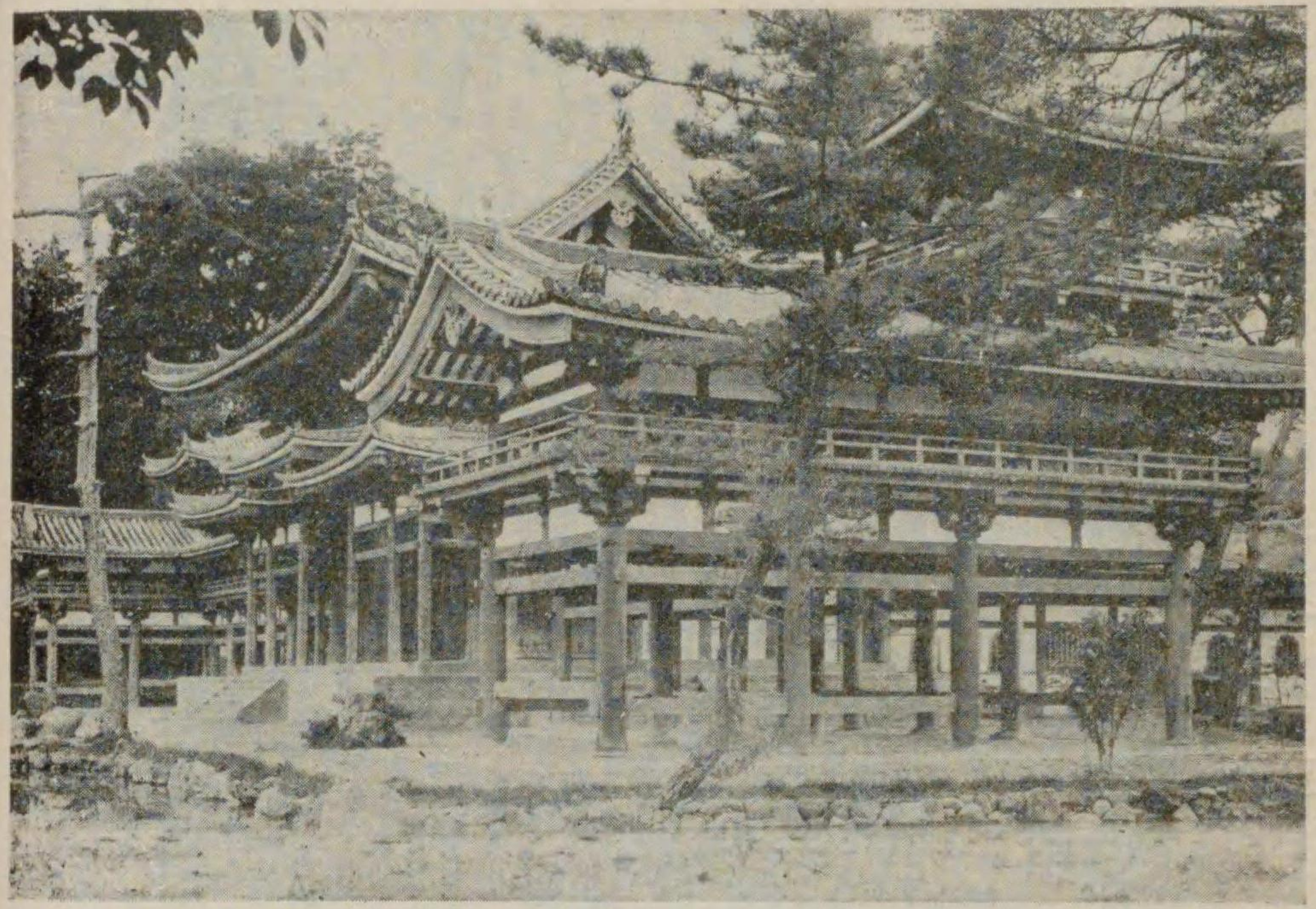


醍醐寺　五重塔

口繪目次

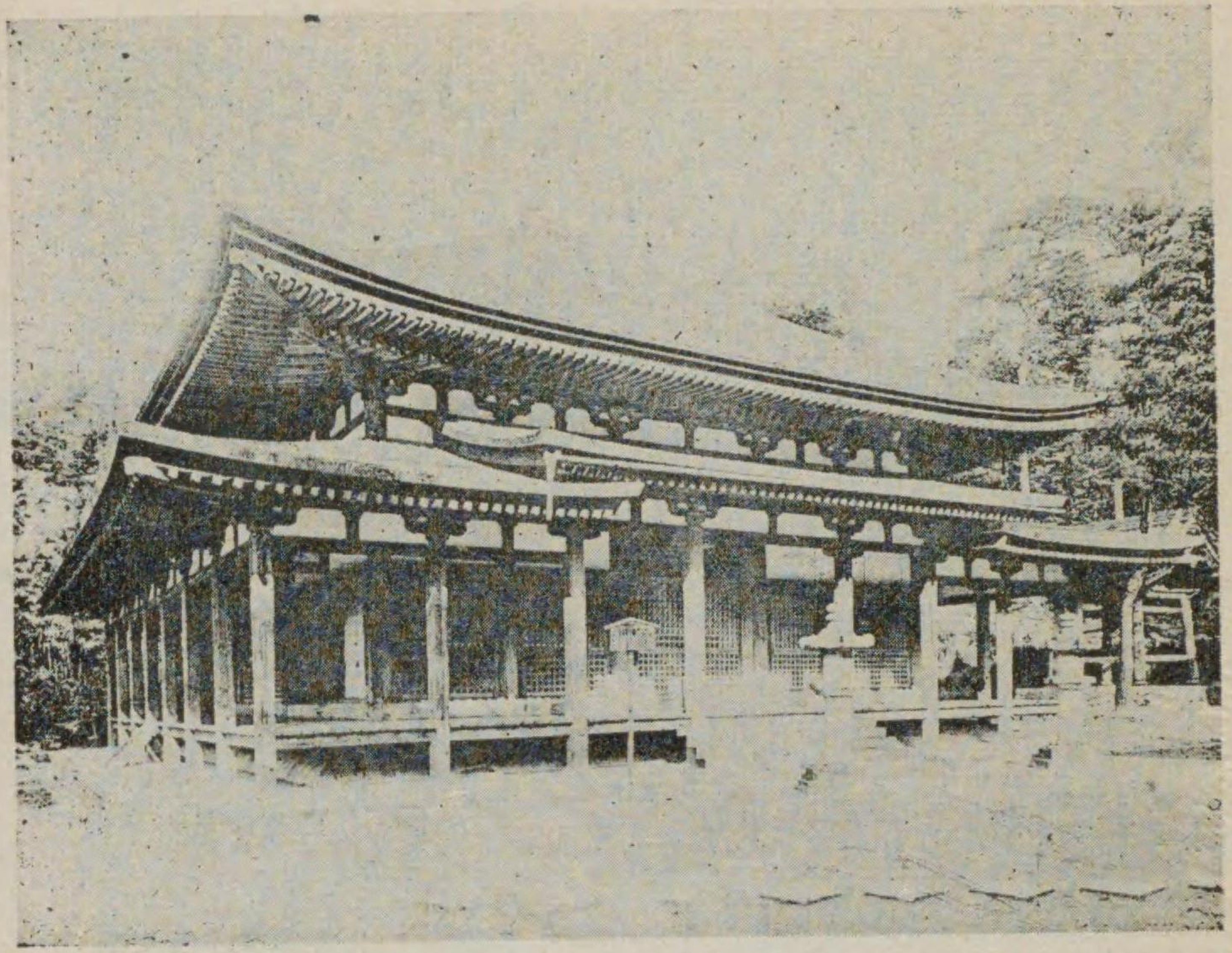
醍醐寺五重塔
平等院鳳凰堂
同內部
法界寺阿彌陀堂
同內部
中尊寺金色堂內部
淨瑠璃寺吉祥天女像
鳳凰堂扉繪

鳳凰堂　本尊

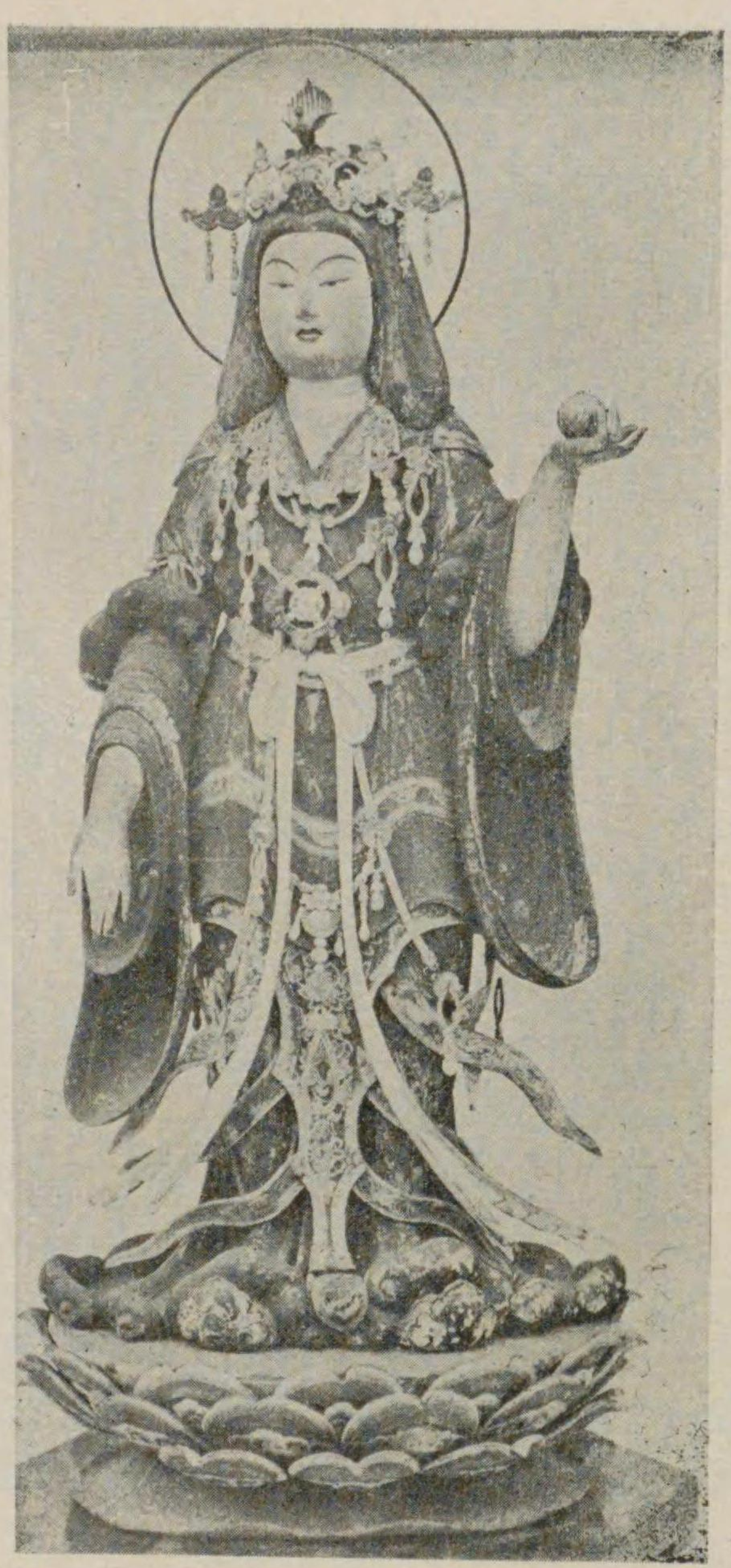


平等院　鳳凰堂

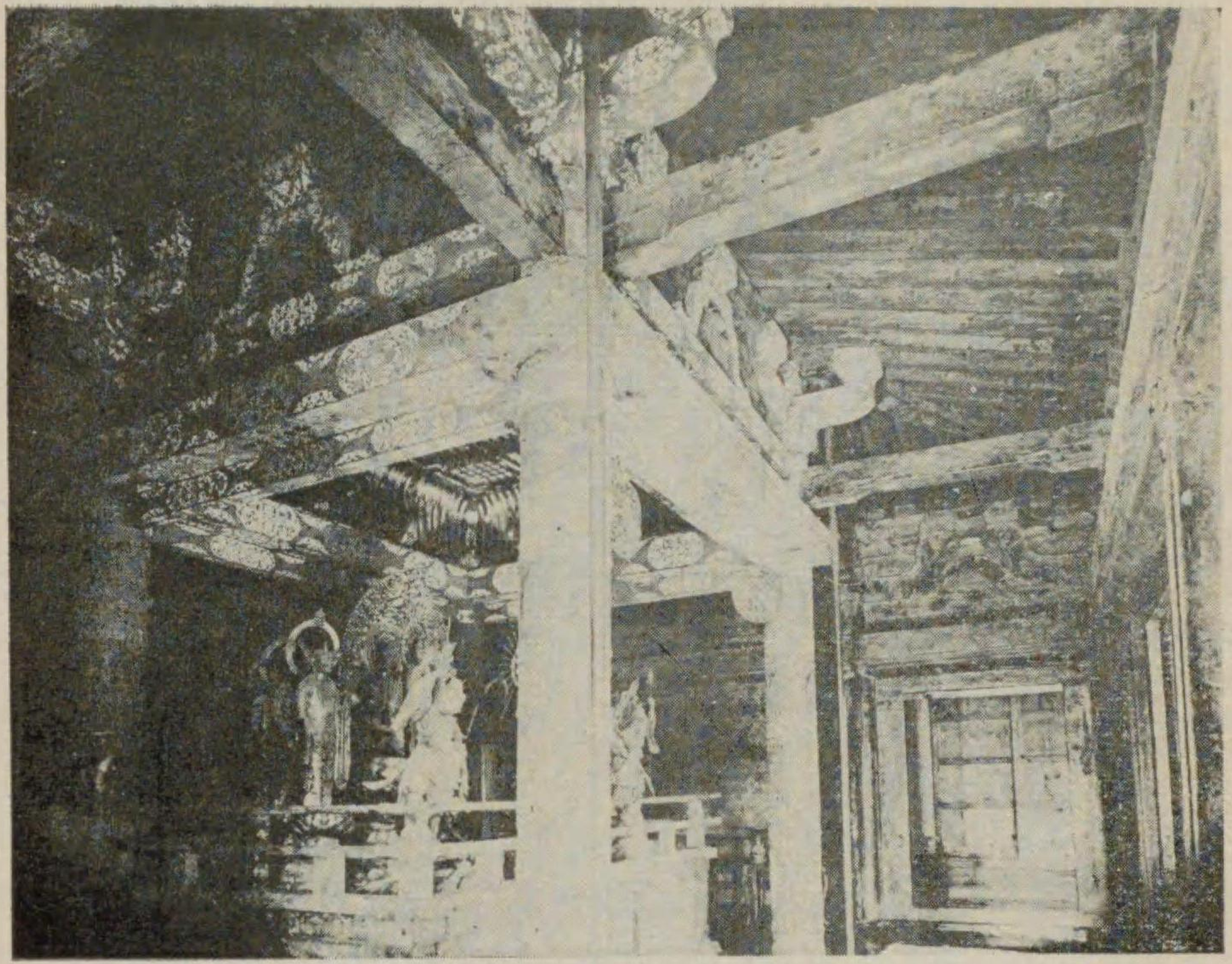
法界寺阿彌陀堂　本尊



法界寺　阿彌陀堂

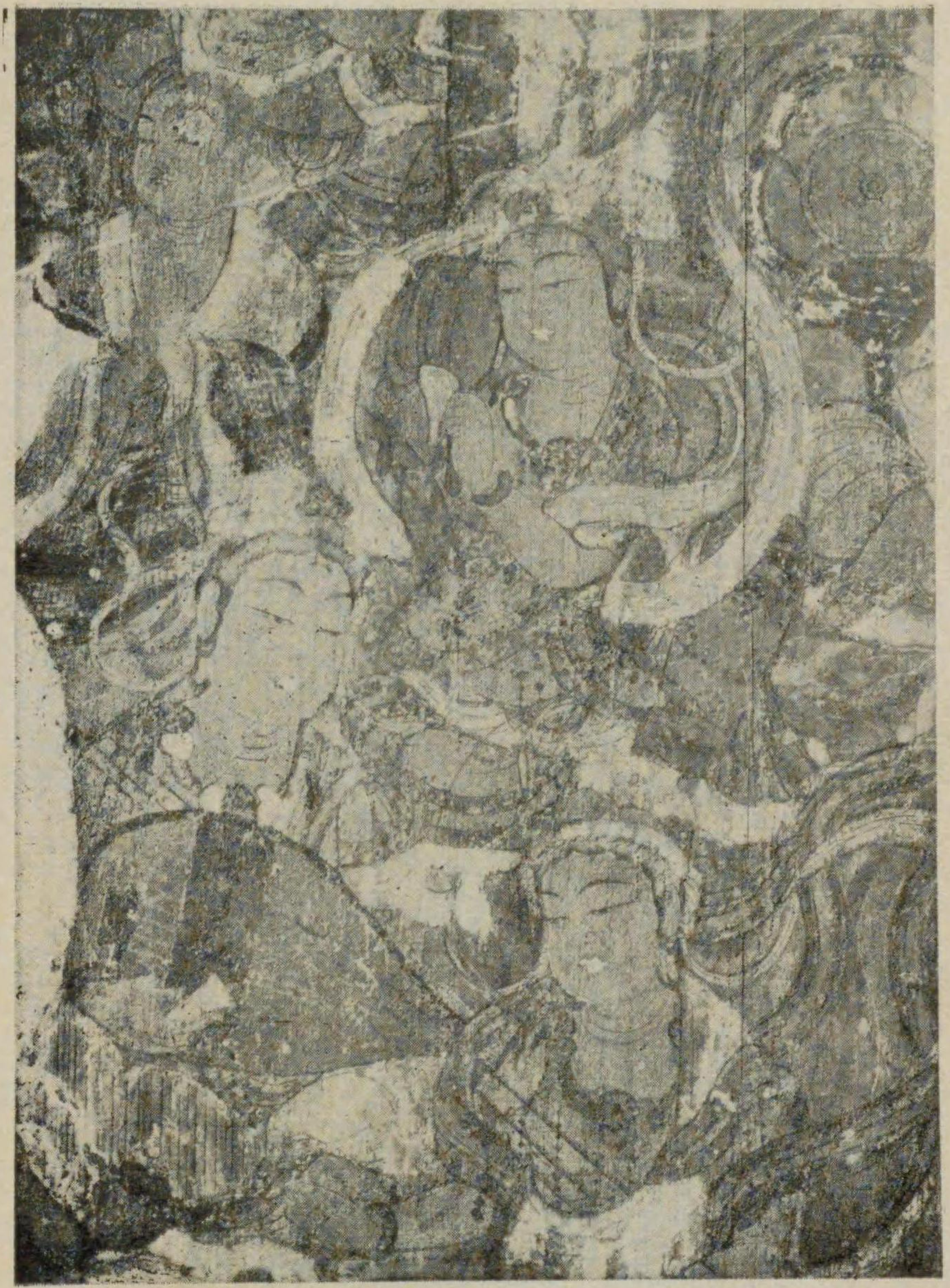


淨瑠璃寺　吉祥天女像



中尊寺金色堂　內部

第六章　藤初時代



鳳凰堂　扉絵

一　時代の大勢

概観

藤初時代は、宇多天皇の寛平六年(八九四)から堀河天皇の寛治元年(一〇八七)までの百九十三年間である。寛平六年と云ふのは遣唐使の廢止された年で、即ち唐との公の交通が絶えた時である。既に弘仁時代から唐の影響は薄弱となり、同化の分子が現はれてゐたのであるが、遣唐使廢止後は、益々同化の分子が多くなり、つひに同化時代を現出した。それは鳥羽天皇の建久三年(一一九二)まで續き、これを藤原時代と稱するのは、藤原氏擅權の時代だつたからである。尤も末葉の二十五六年間は、平氏の擅權時代で、特に平氏時代を設ける美術史家もある。又平安奠都以來を平安朝時代とすれば、弘仁時代は前期で、藤原時代は本期となる事、既に前章の冒頭で述べた通りである。さて藤原時代は實に三百年に垂んとしてゐるので、これ

を前期後期、又は前中後の三期に分つ事も出來るが、私は之れを二つに分け藤初、藤末の二時代とした。其の境界たる寛治元年は、院政の始まつた年であつて、藤原氏の擅權時代は既に終つてゐる。故に一般史では院政後を院政時代と云つてゐるが、美術史としては、藤原時代は大體一貫してゐるので、別の名前を用ひずに藤初、藤末としたのである。

藤原氏の擅權

當代に擅權した藤原氏の祖は、鎌足公である。鎌足は天智天皇を助けて國家を中興した功により、藤原姓を賜はつた。鎌足の子不比等も父の功によつて用ひられ、宮子、武智麿(南家)、房前(北家)、宇合(式家)、麻呂(京家)等の子女を生み、宮子は文武天皇の夫人となり、聖武天皇を生み奉つた。玆に藤原氏の榮華を得る基が出來たので、これは天平時代の事である。南北式京の四家には勢力の消長があり、爭もあつたが、房前の孫に內麿が生ずるに至つて、本家として長く榮える事となつた。即ち內麿から冬嗣を經て

良房に至り、太政大臣となり、始めて人臣にして相國に任ぜらるゝ例を開き、文德天皇崩御の後、良房の女の生み奉る淸和天皇御年九歳で即位あらせらるゝや、萬機を攝行し、玆に人臣攝政の例を作り、愈々藤原氏擅權の時代となつた。これ貞觀元年(八五九)で、猶弘仁時代の末期である。淸和天皇は御元服後、親政を執られたが、次の陽成、光孝、宇多の三代は良房の孫、基經が攝政となり、其の女は醍醐天皇に配して朱雀、村上兩帝を生み奉り、以後冷泉圓融、花山、一條、三條、後一條、後朱雀、後冷泉の諸帝すべて藤原氏の出である。而して藤原氏は基經から忠平、師輔、兼家を經て道長の代となり榮華の極點に達した。それは一條天皇の長德二年(九九六)から三條天皇の長和五年(一〇一六)頃までの二十年間で、其の前二十年間と、道長の子賴通の代五十年、即ち前後約百年間が、藤原氏の擅權時代である。後冷泉天皇の次の後三條天皇は、久振で藤原氏の出でないので、記錄所を置き、藤原氏以外の人才

を登用し、在位四年にして位を白河天皇に讓り、太上天皇として萬機を親裁せられんとしたが、御讓位後五ヶ月で崩御せられたので、白河天皇は應德三年位を堀河天皇に讓られ、上皇として政治を執り、玆に所謂院政が始まるのである。藤原氏全盛の時代は、同時に遊樂の時代であつて、歌合、繪合に興じ、詩歌管弦の遊に耽り、從つて風俗は婬靡に流れた。併し京都の貴族上流がかうして遊樂に耽つてゐる間に、將門や純友や忠常の亂があり、又前九年の役もあり、地方には兵亂が起り、其の間に源氏の潛勢力が養はれつゝあつた。藤原時代は實に京都のみを主とした貴族の時代であつたのである。

佛教の特色

佛教は前代に天台、眞言の二宗が興り、南都六宗に代つて漸次勢力を高め、朝廷と接近し、貴族の信仰を得て、當代に至り益々盛んとなつた。天台宗に於いては、既に前代に傳教大師の後に、義眞、圓仁、圓珍等の高僧が出たが、當代となつては良源、餘慶、源信、覺運等輩出し、

眞言宗に於いては、前代に弘法大師の後に、實慧、眞雅、益信、聖寶、當代に寛朝、仁海等の高僧が出た。而して之等の高僧は、盛んに加持、祈禱、修法をなした。これは宗祖傳教大師が毘盧遮那法を修し、弘法大師が仁王經法、請雨經法を修した以來の事であるが、當代に至つて益々盛に、天變、地異、降賊、治病等、苟も一寸變つた事があれば修法し、又年中行事的に每月定つた修法があり、しかもその法會に參する僧の數は百僧から千僧多い時は萬僧に及び、當代の佛教は、一面から云へば、修法の佛教と化した感がある。次に天平時代の南都の佛教が國家的佛教であつたのと違つて、當代の佛教は貴族的佛教であつた。貴族と云つても藤原氏一族の事で、勿論、皇室の信仰歸依もあつたが、それも國家の爲めではなく、御一族の爲めで、藤原氏の出の天皇としては、藤原氏一族と變りはなかつた。即ち皇室としては、所謂六勝寺が何れも其の御願で建てられ、藤原氏は、法勝寺(忠平)、楞嚴院(師輔)、法住

寺(爲光)、法興院(兼家)、法成寺(道長)、淨妙寺(同上)、平等院(頼通)等を建てた。其の中、平等院の鳳凰堂一つを除いて他は悉く亡びたが、其の鳳凰堂だけをみても、又法成寺や法勝寺の供養記をみても、其の規模の大、裝飾の美、供養の盛大であつた事がわかる。

淨土教の勃興

淨土教即ち阿彌陀如來にすがつて極樂淨土を願ふ他力教の我が國へ入つたのは古い事である。飛鳥時代に於いて、既に聖德太子は西方淨土を願はれ、橘夫人念持の彌陀三尊もあるし、皇極、孝德の頃慧隱が宮中で無量壽經を講じ、三論の智光が淨土曼荼羅を描いた事も傳へられてゐる。又天平時代には諸國の國分寺に阿彌陀淨土曼荼羅の畫像を作らせ、七日目に稱讚淨土經を寫さしめ、周忌には阿彌陀如來及び脇侍を作らせたとも傳へられてゐる。又弘仁時代に至つては、傳敎大師が四種三昧の中に常行三昧を加へ、圓仁之れを繼承して常行三昧堂を叡山に建立し彌陀像を安置した。

而して藤初時代となつては、初めから其の常行堂で不斷念佛が始められ、初期に生れた空也上人は、天慶元年京に入つて專ら彌陀の佛說を稱へて、市井に勸め、康保二年京を出でゝ奧羽までも念佛を以つて遊化した。併し眞に我が國に淨土教興隆の基を啓いたのは、天台宗の良源(慈惠僧正)の門から出た源信(惠心僧都)である。僧都は空也上人が入洛して市井に念佛を說いた後四年にして大和葛木郡に生れ、叡山に上つて慈惠僧正について顯密敎を究め、四十四歲の時『往生要集』を著した。これに說く所は、淨土門的の往生、善導派の他力念佛であつて、實に我が國に於ける他力念佛の嚆矢である。僧都は當時憚る所があつて、表面は自力念佛を說き、裏面に眞意たる他力念佛を說いたのであるが、之れを觀破したのは法然上人である。上人は藤末時代の人で他力念佛は上人に大に弘められたが、其の基を啓いたのは惠心僧都で、これが美術に對しても大いなる影響を與へ、所謂淨土教美術が現はれたのである。

本地垂跡説

本地垂跡説、即ち神佛の融合については、屢々述べたが、それは當代に至つて十分に實現された。卽ち神社の境内に神宮寺を設けるばかりでなく、神社に佛舍利を奉り、神社に於いて修法を行ひ、佛經を慶した事が中々多かつた。又佛寺の傍には鎭守社を設け、神社にも神像を安置した事は、『延喜式』に全國の神社に數千の神像を刻んで分つた記事があるので明かである。又神社建築が佛教建築の影響を受けた事も益々顯著となつた。一寸玆に宗教の事を終るに當つて、付け加へて置くのは、天台宗に於ける山門、寺門の爭で、慈覺(圓仁)派、智證(圓珍)派とが爭ひ、これは餘慶の時から最も甚しくなり、長く解けなかつた。しかも其の爭は僧侶にして武器を携へ、所謂僧兵と稱し、又嗷訴なる事が起り、延暦寺の僧兵は山王の神輿を、興福寺の僧兵は春日の神木を奉じて入洛し、無理を訴へた。これは藤末時代に至つて甚しく、かくして僧侶は墮落して行つた。

文學

漢文學は既に前代の末期に於いて國文學に移つたが、當代は愈々國文學全盛の時代となつた。まづ當代の劈頭に於いて『古今集』の勅選が行はれた。それは紀貫之、紀友則、凡河內躬恒、壬生忠岑の四人が勅を奉じて選んだもので、延喜五年に出來、勅選歌集の嚆矢で、選集續出の魁となつた。猶『古今集』には、貫之が國文で序を書いてゐるが、これが國文學に對して歴史的價値あるもので、貫之の他の國文の著『大堰川行幸和歌序』『土佐日記』と共に、國文興隆の先驅となつたものである。次で天暦五年には內裏の昭陽舍(梨壺)に、始めて和歌所を置かれ、藏人少將藤原伊尹を其の別當とし大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等を屬せしめ、これを梨壺の五歌仙と云ひ、五歌仙に選ばしめられたのが『後選和歌集』である。これは『古今集』より劣るものであるが、更らに第三に出た勅選歌集『拾遺集』よりは優つてゐる。國文は貫之の後を受けて、『大和物語』、『蜻蛉日記』、『宇津保物語』、

『落窪物語』等が續々出來、ついで中葉以後に至つては『和泉式部日記』『枕草紙』『源氏物語』等が現はれた。和泉式部は、前の業平後の西行と共に平安朝の三大歌人と云ふべく、赤染衞門、藤原實方、能因法師なども歌人として名が高かつた。『枕草紙』は清少納言の隨筆『源氏物語』は紫式部の小說で、當代の二大作物である許りでなく、我が國文學中の二大傑作である。共に著者が婦人であることも注意すべく、當代の國文學界に婦人の多いのは他の時代に類のない事である。猶末期には『狹衣物語』『濱松中納言物語』『更科日記』などが出た。漢文學は前代の末から衰へたが、當代に於いても大江朝綱、菅原文時兼明親王、大江維時、源順、橘直幹等の名家が出た。文學に附隨して、之れに緣ある遊の行はれたのも當代の特色である。第一は歌合で、他に菊子合、撫子合、花合、前栽合、種合、扇合、艶書合など、多くは花について歌の勝負を爭ふ遊で、詩の方でも詩合が行はれた。また之等の文學的遊戲と共に、

管弦の遊も盛んであつた。

二　建築

概觀　藤原時代の美術は、飛鳥以來の支那摸倣から漸く離れて、同化の傾向が著しく、日本趣味の横溢したものとなり、佛敎關係のものは淨土敎の影響を受けたものが多い。建築に於いても、宮殿を始め貴族の邸宅、別莊には日本趣味が發揮され、神社は神佛融合思想の爲めに佛寺の影響を受け、佛寺は皇室及び貴族の御願によつて建立された大伽藍は、壯麗華美で、淨土敎の方から建てられた阿彌陀堂は、殊に裝飾が豊麗であつた。神社住宅、佛寺の事は後に詳說するが、宮殿建築は、前代の始め新都經營の際、新築されてから度々火災に罹り、其の都度再建になり、技術は進步したであらうが、藤初時代百九十年間に十五回も炎上したので、經費の節減もあり、

却つて當初の壯觀を失つたやうである。

神社建築

神佛融合思想の爲め、神社建築が佛教建築の影響を受けたのは、天平時代末期からであるが、弘仁時代を經て當代に至り、神佛融合思想の盛なると共に、建築上の神佛融合も一層顯著なるものがあつた。前章に述べた春日造と流造も、既に佛教建築の影響を受けたものであつたが、茲に述べやうとする日吉造は、寧ろ佛教建築を基とし、之れに神社建築の形式を加味したやうなものである。又鳥居を樓門に改め、瑞籬を廻廊に改める事も當代に多く行はれたが、それは全く佛教建築を採用したものである。日吉造は聖帝造とも云ひ、入母屋造向拜附の背面を少し切り去つたやうな形式で、延暦寺の鎭守たる日吉神社に用ひられたので其の名が起り、今日の同社殿は、天正十四年(一五八六)の再建である。神社に入母屋造を用ひたのは、これが嚆矢で、明かに佛教建築の形式から來たものである。平面も五間四面又

は五間三面で、佛寺と同樣である。八幡造は、神明造を前後に二つ並べて向拜をつけたもので、正面からみれば、單に神明造に向拜を附けたものと見える。此の前後に並べるのは、後世權現造などで二殿を前後に並べる源となつた。八幡造の模範は、宇佐の八幡、即ち宇佐神宮であるが、現在の社殿は、文久元年(一八六一)の再建である。前章で述べた春日造と流造とは、當代にも多く用ひられ、殊に流造は、日本趣味に富み、藤原時代の尙好に適した形式である。

神社建築の遺物

當代までに現はれた諸形式の神社建築が一つも其實例を遺さない間に、當代唯一の神社建築遺物がある。それは鳳凰堂から程遠からぬ宇治川對岸にある宇治上神社である。此の神社は、醍醐天皇の昌泰年間神托によつて建立を命ぜられ、延喜元年社殿を作つたと傳へられてゐるが、實際を見ると、鳳凰堂前後のものらしく、實に神社建築最古の遺物である。

（拜殿は鎌倉時代）。元來一間社流造（正面の柱間一つの時、一間社と云ひ、三つの時は三間社といふ）を間隔を置いて三つ並べたもので、左右の社殿が大きく、これに根屋も葺いて中央の社殿は其の下に入つてゐる。であるから外觀は五間三面の切妻造となり、檜皮葺である。向拜一間がつき、其の柱は面とりの角柱で、舟肘木を用ひ、勾欄をつけてある。其の手法が鳳凰堂に似てゐる。本殿の組物は三斗で、左右二殿の正面に立派な本蟇股があり、金色堂、醍醐寺藥師堂のものと共に藤原時代の三蟇股と云はれる。

住宅建築

住宅建築は、貴族が勢力を有し、榮華を極めた結果、貴族の邸宅に於いて頗る發達を遂げた。即ち當代貴族の邸宅は、之れを寢殿造と云ひ、藤末時代は勿論、鎌倉、室町時代の末に至る迄、京都の貴族の間に行はれ、桃山時代となつて書院造が之れに代つた。弘仁時代までの貴族の住宅については詳細を知る事が出來ないばかりでなく、特に何造といふやう

な名もない位で、恐らく簡單質素のものだつたらうと思ふ。それが藤初時代となり、始めて寢殿造なる名が現はれたので、我が國の住宅建築は、茲に新紀元を生じたものと見る事が出來る。寢殿造は、方形に近い矩形の地面に築地を廻らし、中央に寢殿を置き、北、東、西に對屋（たいのや）を建て、其の間は渡廊でつながれてゐる。斯の如く一つ宛別々の構にするのを一家一構と稱する。寢殿の南は中庭で、庭を隔てゝ池があり、池の中央に島を作り橋を架する。池の南は南庭となり築山を作る。東西對屋から廊を南に出し、東には泉殿、西には釣殿を作る。其の廊の中程に中門を作り、中門から出たところの築地に四脚門を開き出入に便する。寢殿は主人が居り、客に對面する所で、其の平面は多く七間四面（一間の柱間は普通一丈）であるが、時には五間四面、九間四面にする。何れにしても單層、四注で、檜皮葺である。七間四面の場合は、五間二面を身舍とし、其の周圍一間通りを廂とし、其のそとに簀子の椽を廻らしてゐる。

廂の外、南面は蔀戸を立て、側面に妻戸を設け、普通其所から出入する。他の三方は多く櫺子窓で、必要のある所は戸となつてゐる。組物は普通舟肘木で垂木は疎垂木となつてゐる。これは現今の普通の家の様に垂木の間隔をとるやり方で、社寺のは繁垂木である。その中間に半繁垂木といふのもある。内部天井は、廂は化粧屋根裏で、身舎には天井を張り、組入天井又は小組格天井とする。床は張るが、疊は敷きつめず、持運びの出來る疊を用ひる。身舍と廂との間は、多くの場合、格子戸で、其の内側に翠簾を垂れ、内部は障子で部屋を仕切り、中央に張臺(寢床)を置き、左右に置疊(座用)を置き、几帳を立てる。すべて素木の儘で別に裝飾もない。對屋は夫人を始め家族の起居する所で、釣殿では釣をなし、泉殿では涼んだり、月見を催す。對屋の屋根は、入母屋、四注、切妻等を混用した。寢殿造は、其の配置、寢殿の平面及び立面、其の檜皮葺である點等から見て、佛教建築とは關係なく、内裡建築から

出た事が明かである。當代貴族の豪奢は、其の邸宅迄も、内裡建築を模倣したのであらう。而して其の表現は、優美、高雅、輕快で、當代の趣味を現はし又日本趣味の横溢したものである。猶寢殿造で注意すべき事は、建築と庭園との結合及び造園術の發達である。かの寢殿の前に庭をとり池を穿ち島を作り橋を架し山を築くが如きは、建築と庭園とを結合したもので、建築が周園の自然との關係を生じた點を注意すべく、造園術の發達としても觀過すべきでない。最後に寢殿造は、一家一構であるが、當代の中葉、花山天皇の頃から作合せが始まつたと傳へられてゐる。これは曲つた平面や凸字形凹字形の平面を有する家の屋根を續けて葺く事で、書院造には盛んに行はれ、今日も普通行はれるが、其の端を玆に發したのである。

佛教建築

佛教建築は、矢張建築の中心をなし、貴族的佛教の產物として、大伽藍が建立せられ、新興の淨土教の爲めに阿彌陀堂が建てられ

たが、再建も相當にある。左に遺物に重きを置いて主なものを擧げる。

醍醐延喜七年	（九〇七）	醍醐寺藥師堂（上）	
同　十一年	（九一一）	同寺御影堂（上）	
村上天暦五年	（九五一）	同寺五重塔（下）	現存
圓融永觀元年	（九八三）	永觀寺	
花山寛和元年	（九八五）	大原三千院	現存
一條正暦二年	（九九一）	法隆寺大講堂（移建）	現存
同　年	（九九一）	同寺鐘樓	現存
後一條治安二年	（一〇二二）	法成寺	
後冷泉永承二年	（一〇四七）	淨瑠璃寺	本堂現存
同　天喜元年	（一〇五三）	平等院鳳凰堂	現存
白河承暦元年	（一〇七七）	法勝寺	
？		法界寺	阿彌陀堂現存

前代の遺物が僅に室生寺の五重塔と金堂と二つに過ぎないのに反して、當代は十に近い遺物を有し、しかも其の中には大傑作を含んでゐるが、當代を代表すべき法成、法勝の二寺は全然亡失して俤だにないのは遺憾である。

法成寺と法勝寺

法成寺は、藤原氏豪華の絶頂たる道長の建立に係り、金堂、五大堂、阿彌陀堂、釋迦堂、千手堂、文珠堂、法華堂、戒壇堂、眞言堂、三昧堂、大塔、鐘樓、經藏、東西院西北院（僧房）、浴室等から成つてゐた。金堂は大御堂と稱し、柱、組物、梁等は紫檀其の他の銘木を用ひ、これに漆を塗り、卷繪を施し、螺鈿、寶石を鏤め、壁には釋迦八相、飛天其の他を極彩色で描き、堂内には本尊として一代の名工定朝の大日如來像、高さ三丈二尺のものを安置し、左右には高さ二丈の釋迦、藥師、文珠、彌勒の像を安置し、外に高さ九尺の梵天、帝釋、四天王等を安置した、以つて其の規模

の大きい事がわかる。又五大堂には丈六の不動、四大尊、阿彌陀堂には丈六の阿彌陀像九體を安置した。法成寺の位置は、京極の東、荒神ロの北に當つてゐる。次に法勝寺は、白河天皇の御願で、金堂、講堂、阿彌陀堂、五大堂、法華堂、八角九重塔其の他が建てられた。金堂は七間四面で、本尊として三丈二尺の毘盧遮那佛を安置し、無量壽如來、天皷雷音如來の外、九尺の六天像を安置した。講堂も七間四面で、二丈の釋迦像を安置し、阿彌陀堂は十一間四面で、丈六の阿彌陀像九體を安置し、五大堂は五間四面で、二丈六尺の不動像を安置した。又法華堂には七寶多寶塔一基を安置し、八角九重塔は高さ八十四丈と稱される。法勝寺の位置は今の京都市では東部に當つてゐる。猶兩寺落慶供養の盛況は『供養記』に記されてゐるが、今は略する。

醍醐寺五重塔

醍醐寺は京都の東南郊外に位置し、理源大師聖寶が貞觀年中創立し、醍醐天皇の延喜九年官寺となり、天暦三年には清涼殿を賜う

て法華三昧堂とし、延喜天暦の頃盛に堂塔が建てられた。それは山上と山下に二十六町を距てゝ建てられ、現存の建物は、山下に五重塔(藤初)、金堂(藤末)、三寶院(桃山)、山上に藥師堂(藤末)、清龍堂(室町)、如意輪堂(慶長)、五大堂(同上)、御影堂(同上)等である。之等の配置は云ふまでもなく自由である。五重塔は、山上山下を通じて最古の建築で、山下の松林中に位置し、承平六年藤原忠平が資を投じて中心柱を曳き來り、天暦五年落成し、其の年代の頗る明確なものである。其の後慶長年間豊臣秀頼が大修繕を加へ、內部は多少補つた所もあるが、大體はもとの儘である。石壇の上に立ち、方三間、四方一間づゝ二枚開の戸で他は櫺子窓となつてゐる。內部には柱が四本あり、これを四天柱と稱し、其の間を一段高くし佛壇とし、中央に中心柱がある。中心柱の四面に板を張り、四方に佛像を描いてゐる。組物は三手先、軒は二軒、二重目以上には欄を廻らし、五重の上には青銅の相輪がある。內部初重の天井は組入天井で、極彩色の寶

相花を描いてゐる。猶柱、天井、扉等にも同様に寶相花を描き、四方の壁には、上方に佛像、下方に眞言八祖像が描かれてゐるが、比較的よく保存せられ當代初葉の繪畫として貴重な遺物である。此の塔は塔身の高さに比して幅が廣いので安定の感を與へ、又相輪の長さが全長の三割四分、即ち約三分の一に當るので、一層安定の感じを與へる。而して塔本來の意味から重要な相輪に對して、塔身は臺に役立つてゐる。藤初時代の初期を代表する建築で、五重塔としては、法隆寺のものに亞ぐ傑作である。

平等院鳳凰堂

平等院は、もと源融の別莊地で、宇治川に臨み、當時から有名な景色のいゝ所で、陽成、宇多、朱雀三帝も行幸せられた。後藤原道長の手に歸し、次で頼通の領となり、頼通は永承七年、之れを寺とし、堂塔を造營し、平等院と名づけた。當時建てられた堂塔は、阿彌陀堂、即ち鳳凰堂、經堂、金堂、三重塔、講堂、鐘樓、東法華堂、西法華堂、五大堂等で

あつたが、現存するものは、鳳凰堂の外、釣殿(鎌倉時代)、鐘樓(室町時代)があるのみである。鳳凰堂の位置は、東に宇治川を隔てゝ朝日山に對し、西南には小丘があり、景色はよいが、地勢上南面して建てる事が出來ないので、頼通は大江匡房の言により他に例ある事を知り、堂を東に向け、大門を北に建て、他の諸堂も自由に配置した。鳳凰堂は、平面、立面とも、全く他に類のない頗る珍しい建築である。即ち先づ平面から云ふと、本殿は方三間で、周圍に一間の裳層を有し、本殿の左右に翼廊の出づる事五間、更らに前方に曲折して二間あり、本殿の後方には尾廊が七間延びてゐる。此の形が鳥の羽翼を張り尾をのばしてゐる様なので、鳳凰堂と名づけたとも云ひ、又本殿屋上に銅製の鳳凰を載せたので左様云ふとも傳へられる。立面は、本殿は重層、入母屋造で、裳層の屋根は正面の中央を破つて一段高くし、翼廊及び尾廊は、單層、切妻造で、翼廊の曲折する角の所は、重層で寶形造となつてゐる。本殿は一

段高い石段上に建てられ、柱は太い圓柱で、組物は三手先を用ひ、裳層の柱は大きく面をとつた角柱で、組物は三斗である。裳層の方は一般に木割が細く、柱の外、虹梁、桁、梁、組物の斗や肘木など皆面がとつてある。翼廊は平地の上に建てられ、やゝ細い圓柱を用ひ、組物は出組である。本殿の四方は、壁若しくは扉で圍まれてゐるが、翼廊は柱のみで、吹ぬきとなつてゐる。すべて屋根は本瓦葺で、本殿の大棟に銅鳳がのつてゐる。本殿の内部に入ると、床は低く板張で、中央一間を佛壇とし、其の上に丈六の彌陀座像を安置してある。天井は折上組入天井で、小壁には五十二菩薩を雲中供養のさまに懸け列ねてゐる、外部は、柱、壁とも丹塗とし、垂木、尾垂木の鼻には透彫唐草模樣の金具を附し、扉には寶相花の毛彫ある八双金具を附してある。此の扉には菩薩、天人、山水等を彩色で描き、柱にも寶相花及び菩薩を、長押、貫、組物等にも寶相花を、天井の格緣、格間には寶相花を一つ一つ何れも彩

色で描き、四方の壁には、淨土曼荼羅、九品淨土を彩色で描いてゐる。又本尊の上には大なる天蓋を下げ、下には大なる佛壇があり、兩者とも透彫、螺鈿其の他を以つて裝飾されてゐる。以上鳳凰堂の建築及び裝飾について大要を說明したのであるが、詳細に渉つては到底茲に述べられないので、其特色と價値とについて一言して置く。第一には、其の位置が優れ、建築と自然とをよく結合してゐる事である。大體よい位置である上に、堂前に池を穿ち、其の水は後方尾廊の下まで引かれてゐる。第二には、平面が變化多く、しかもよく纒まつてゐることである。本殿の左右に翼廊を出し、其れを前方に屈曲させ、後方に尾廊を出した意匠は、全く獨特のもので、恐らく寢殿造などからヒントを得たのであらうが、實に驚嘆すべき卓拔な意匠である。第三には、立面の變化もこれに伴ひ、變化多くしてしかも統一されてゐる事である。屋根だけみても本殿は大きな入母屋で全體を統一し、翼廊は切妻とし、左右

角の樓には寶形を用ひ、且つ本殿裳層の屋根の中央を破つて一段高くし、翼廊の兩端は切妻の妻を見せてゐる。かく十分な變化を作りながら、各部の比例は最も巧妙に、大體としては嚴格な對稱を守り、整然として一絲亂れず、かの美學上の形式原理たる「多樣の統一」は、鳳凰堂によつて具體化されてゐるのである。第四には、細部に於いて一層巧妙な變化を求めてゐる事である。例へば柱は本殿を圓柱とし、裳層を角柱とした如き、組物は本殿に三手先、裳層に三斗、翼樓に出組を用ひた如き著しい例である。最後に第五に、裝飾として各種の手法を用ひ、裝嚴、華麗を極めた事である。猶彫刻としては本尊及び五十二佛、繪畫としては扉繪、壁畫があり、工藝美術としては、天蓋、蓮座、佛壇等があり、當代美術界最大の遺物であるばかりでなく、日本美術史上に於ける一大傑作で、世界美術史上に於いても相當の價値があり、同時代に出來たピザの堂塔に比べて、材料、樣

式は全然遜色はないと思ふ。

法界寺阿彌陀堂

法界寺は、京都市東南の近郊に在る。弘仁年間、日野大納言家宗が創立し、荒廢してゐたのを永承六年(一〇五一)日野三位資業が諸堂を再興し、現存の阿彌陀堂は當時のものと傳へてゐる。果して然らば鳳凰堂竣工の二年前に當る。外の建築には藥師堂がもと奈良縣龍田町に在つた胎金堂(室町時代)を近年移建したのがあるのみである。阿彌陀堂の建築年代については、色々記錄もあるが、永承六年よりは大分遲れるらしく、藤初時代の末葉位と考へられる。實物の上からも鳳凰堂よりは遲れてゐる。方五間で、裳層を有し、屋根は寶形造の檜皮葺である。裳層の屋根の前面中央を破つて一段高くしてあるのは、鳳凰堂にもあつたやり方である。四方に廻椽を廻らし、正面及び左右の三方に階段を附してある。本殿の柱は比較的太い圓柱で、裳層の柱はやゝ細き角柱で、面をとつてあるが、この手法の變化も、鳳凰堂と

全く同様である。組物は本殿、裳層とも三斗である。內部は床を張り、四本の柱を立て、其の內を內陣とし、佛壇を置き、丈六の彌陀座像を安置してある。天井は外陣を化粧屋根裏とし、內陣は折上組入天井となつてゐる。裝飾としては內外木材の部分を丹塗とし、內部は至る所彩色を施してある。先づ柱は布で包み、その上へ漆を塗り、之れに佛菩薩の像を描き、菩薩の間には唐草模樣を描き、天井、組物等には寶相花を描いてある。又小壁には天人及び樂器の空中に飛んでゐる樣を漆喰の上に描き、繪畫として立派のものである。此の建築は、阿彌陀堂建築の模範とすべきもので、簡單ではあるが、全體の恰好が頗るよく、屋根の勾配の緩くして檜皮葺を用ひた點、組物に三手先を用ひないで三斗を用ひた點など、總べて優雅、輕快の表現を有し、藤初時代に發展した日本趣味をよく發揮した建築として大なる價値があり、しかも內部の裝飾、壁畫、彫刻等も立派な作なので、一層價値がある。鳳凰堂と

比べては劣るけれども、亦日本美術史上、重要な遺物である。

其他の遺物

次に他の遺物について簡單に述べて置く。大原の三千院(極樂院)は、寛和元年、花山天皇の勅願によつて惠心僧都が建立し、僧都の母安養尼が住んだ遺跡と傳へてゐる。三間四面(梁間三間、桁行四間)、單層、入母屋造(妻入)、柿葺で、後世一間の向拜を附した。周圍に廻椽を廻らし、勾欄を附し、正面に階段がある。內部は床を張り、四本の柱があり、其の內を內陣とし、後の二本の柱間を壁とし、其の前に勾欄ある佛壇を置き、彌陀三尊を安置してゐる。天井は中央を舟底形としてあるが、それは小さな堂に丈六の像を安置する爲めであらう。天井には二十五菩薩を描き、彌陀三尊の後壁には、兩界曼荼羅、四方の壁には、無數の小佛、柱、長押、垂木間等には彩色で寶相花を描いてある。此の堂は、所謂阿彌陀堂建築の小さなもので、平面のほゞ方形な點、內外陣の境界を開放した點、彩色で

二十五菩薩や寶相花を描いて裝飾とした點など、其の特色で、又木割が細くなり、柱に角柱を用ひた事なども阿彌陀堂建築に共通である。後世の補修の多い點は遺憾であるが、當代に勃興した阿彌陀堂建築最古の遺物として注意すべきものである。法隆寺の大講堂は、延長三年火災に罹つた後六十六年を經て、正暦二年、法隆寺別當觀理僧都が山城深草の普明寺の堂舍を移建したものである。其の際再び火災に罹り、金堂や五重塔に災する事を惧れ、もとの位置よりも後方にさげ、北室のあつた所へ即ち今の位置に建てた。此の時移建されたので、其の以前のものであるが、果して何年前のものかわからず移建の際大修補を加へ、猶慶長元和の頃にも大修繕を加へられた。九間四面單層、入母屋造、本瓦葺の建築で、石壇上に立つてゐる。組物は三斗、軒は二軒、內部の床は石敷、天井は組入天井である。全體の比例よく、木割雄大で、平面立面とも天平時代の形式を有し、細部には藤初時代初期の特色があ

る。同寺鐘樓は、恐らく大講堂移建の際の新築に成つたもので、三間二面、重層、切妻造、本瓦葺の小建築である。淨瑠璃寺は、京都府ではあるが、奈良に近く、木津驛の南方約一里の所に在る。寺傳天平十五年の創立、本堂は天元年間再興せられ、永承二年、僧義明によつて再建されたものである。別に鎌倉時代の三重塔がある。十一間四面、單層、四注、本瓦葺の建築で、廻椽を廻してゐる。內部は床を張り、天井は化粧屋根裏で、中央は特に一段高くしてある。十一間四面といふ非常に長い平面は、九體の彌陀を安置する爲めで、法成寺や法勝寺にもあつた。猶中央の天井を一段高くしてあるのは、其處に丈六の彌陀を安置する爲めである。簡單な建築ではあるが、九體の彌陀を安置する爲め、普通の阿彌陀堂とは全然異なる平面を有し、其の唯一の例として注意すべく、前面に池を穿ち、自然との結合も企てられてゐる。九體の彌陀も當代の彫刻である。

三 彫刻

概觀

當代の彫刻は、建築と同じく同化の傾向が著しく、日本趣味のものが現はれたが、種類は不相變佛教彫刻が主で、それは天台、眞言二宗のものも刻まれたが、それよりも當代に勃興した淨土教のものが多く、即ち阿彌陀如來を本尊とし、觀音、勢至を脇侍とする阿彌陀三尊が最も著しい題目である。又吉祥天女の如きものも當代得意の題材であつた。其の材料は前代に引續き木が多く用ひられたが、之れに金箔を貼し、又は彩色を施し、壯嚴にして優美の表現を生じた。而して其の手法は、前代の如く刀法を明かに示さず、圓味を帶び、爲めに優美の表現を强めた。又寶冠、胸飾、光背、台座等も優美、華麗となり、一層佛像をして優美ならしめ、藤末時代に至つては、纖巧に流れ過ぎるものを生じた位である。

主なる彫刻家

當代に至つて特に注意すべき事は、專門彫刻家の名が漸く現はれた事である。前代にも弘法大師始め僧侶で彫刻をしたと傳へられたものがあつたが、當代に至つては、僧侶として會理僧都と惠心僧都が有名であつた外、專門の彫刻家として、康尙、定朝、覺助、長勢等が出た。康尙は當代中期の人で、長保四年に禁裡御八講の本尊白檀の佛體を刻み、寬弘二年には一條天皇等身の金色藥師と十一面觀音とを作つた。かく朝廷の御用をする位であるから無論當時の大家だつたに違ひない。子定朝は一世の大家で道長の奬勵によつて十分其の天才を發揮し、治安二年に法成寺の佛像を彫み、其の功によつて法橋となつたが、僧侶以外に此の名譽を得たのは定朝を以つて嚆矢とする。長曆四年には後朱雀天皇の御持佛を刻み、永承年間道長が興福寺を再興した時には其の佛像を刻み、鳳凰堂の建築に際しては其の本尊を作つた。この鳳凰堂本尊は現に同堂に存し、彼れの大傑作と稱されてゐる。

猶浄瑠璃寺本堂の九體彌陀、四天王、法界寺阿彌陀堂の本尊なども定朝作と傳へられ、我が彫刻史上の大家の一人である事を實際に證明してゐる。又定朝は始めて七條佛所を開き、子覺助、弟子長勢が出た。覺助は法成寺の無量壽院及び五大堂の佛像を刻み、平等院や興福寺の像も作り、法眼となり、長勢は法成寺、圓宗寺、法勝寺、廣隆寺等の佛像を刻み、法印となつた。而して覺助は七條佛所を嗣ぎ、長勢は別に三條佛所を開いた。定朝、覺助、長勢は藤初時代の三大彫刻家であるが、定朝が特に傑れてゐる事は云ふ迄もない。

醍醐寺の諸佛像

醍醐寺は前述の如く、延喜七年理源大師の創立に係り、藥師堂は藤末時代(保安五年)の再建であるが、本尊藥師及脇侍は、當初のもので理源大師の作と傳へ、ほゞ確かなものである。本尊は高さ六尺餘の座像で、大なる蓮座の上に在つて、比例よく、面相の表現頗る勇偉で、藤初時代の特色たる優美と反し、衣文の如きも力強い手法によつてゐる。蓋し前代の

遺風を有し、高僧の英邁な精神を表現したものであらう。當代初期の傑作である。猶藥師堂には、炎魔天、吉祥天、帝釋天の三像がある。何れも寺傳理源大師の作、當代初期の特色を持つてゐる。

法隆寺の諸佛像

法隆寺には、其の創建された飛鳥時代のものを始め、各時代に渉つて遺物があるが、藤初時代のものは比較的多い。即ち大講堂の藥師三尊及び四天王、新堂の藥師三尊及び四天王、金堂の毘沙門天及び吉祥天、夢殿の阿彌陀如來(二體)の外、肖像として繪殿安置の聖徳太子七歳像がある。大講堂は正暦二年の移建に係る事を前に述べたが、堂内の藥師三尊及び四天王は、其の時新しく作られたもので、すべて光背、臺座に至るまで完全に殘つてゐる。本尊は比例よく整ひ、面相温和、衣文流暢、藤原時代の特色を供へ、光背の透彫の唐草模樣及び臺座の浮彫も當代の特色を現はしてゐる、殊に四天王は彩色の裝飾を有し、其の文樣は種々で、よく保存され、當代の

文様を見るべき遺物である。新堂は南大門から中門に至る途の西側にある鎌倉時代の建築であるが、其の藥師三尊と四天王は、藤初時代の中期を下らないものである。本尊は座像で比例よく、面相は温和にして優美、衣が臺座に垂れ下つてゐるのは當代としては珍らしい。臺座も同時のものであるが、當代の臺座としては簡單である。脇侍は立像で、少し腰をひねつた姿勢が面白く、面相は本尊と同樣豐頰で、優美である。四天王も同時のもので、當代の特色を持つてゐる。金堂には飛鳥時代の大彫刻が多いので、毘沙門天と吉祥天とは目立たないが、承曆二年作の記錄があり、當代末期の標準作とする事が出來る。共に彩色裝飾を有し、吉祥天は頗る優美で、淨瑠璃寺のものよりも其の度を增してゐる。毘沙門天はやゝ見劣がするが、それは當代の手法が吉祥天の方に適してゐるためであらう。繪殿の聖德太子像については後に述べる。

鳳凰堂の諸佛

鳳凰堂の建築は、天喜元年に落成したものであるが、其の本尊彌陀も亦同時に定朝によつて作られた。高い臺座の上に載せられた丈六の座像で、其の姿勢と云ひ、比例と云ひ申分のない出來で、特に面相の表現は優美を極め、衣文流暢にして、手法圓熟の域に達してゐる。又光背、臺座もよく保存せられ、光背は一種の唐草を透彫とし、臺座には寶相花を浮彫にしてある。本像は當代第一の大家定朝の傑作で、阿彌陀像彫刻の模範となり、藤初時代の特色を發揮した代表作である。次に小壁にある五十二佛は、雲中供養の有樣に懸け列ねてある。これも本尊同樣定朝の作と傳へてゐる。其の確證はないが、同時のものである事は確かである。姿勢には種々あつて何れも優美に出來てゐる。

淨瑠璃寺の諸佛

淨瑠璃寺本堂の事は建築の項で述べたが、其の內部には本尊を中央にして、左右に四體づゝ總計九體の彌陀を並べてゐる。本尊は

丈六の座像で、他の八體はやゝ小さい。本尊は比例、面相の表現、衣文の手法等、鳳凰堂の本尊とよく似た傑作で、寺傳定朝と云ふのは確かであらう。蓮座も同時の作で、光背は後世の拙作である。他の八體は優美に於いて本尊に優つてゐるが、雄大の風なく、本尊よりは少しく劣つてゐる。定朝指揮の下に弟子等が作つたものかもしれない。とにかく九體の彌陀が並んだ所は偉觀で、當代の有名な寺には幾つもあつたのであるが、何れも記錄のみで、現存してゐるのは本堂ばかりで、しかも本尊は定朝の傑作であるから當代の彫刻として最も貴重な遺物の一つである。本尊のわきにある四天王も定朝作と傳へられ、確證はないが、時代は當つて居る。比例よく、姿勢も整ひ、面相も温和である。鎧には彩色模樣が鮮明に殘つてゐるが、其の種類多く、法隆寺大講堂の四天王のと共に、藤初時代の彩色模樣を研究すべき好材料である、同寺の吉祥天は、今東京の帝室博物館に陳列されてゐる。もと厨子に入つて

居り、其の厨子は東京美術學校に藏されてゐる。本像の年代は始め天平時代と考へられたが、多分當代中葉以後のものであらう。寶冠、胸飾、蓮座等完備し、全部彩色を施し、頗る優美なもので前代の觀心寺の如意輪と比べると、ずつと優しく艶がある。蓋し當代の趣味を發揮した傑作の一つである。

其他の遺物

以上、當代の遺物を多く藏する寺の佛像について述べたが、猶他に主なものが多少あるのを次に列擧する。

觀心寺聖觀音像
道明寺十一面觀音像　二軀
法界寺阿彌陀堂本尊阿彌陀如來
峰定寺吉祥天
廣隆寺十二神將
極樂院本尊藥師像

萬壽寺阿彌陀如來像
圓成寺本尊阿彌陀如來像
當麻寺講堂本尊阿彌陀如來像
北圓堂本尊彌勒像

右の内、觀心寺聖觀音は、等身の木彫で、溫和の表現を有し、比例もよく、當代初期の特色を持つてゐる。道明寺の十一面觀音は二軀あるが、一つは菅公作と稱するもので、時代は當つてゐる。姿勢面相の表現等極めて優れた作である。他の一軀は簡單なものである。法界寺阿彌陀堂は、前に述べた如く藤初時代末葉の建築で、本尊の阿彌陀如來は、丈六の座像で、比例頗るよく、面相は最も優美で、手法殊に流暢を極めてゐる。光背は飛天を模樣化した飛天光で、定朝が好んで作つたと傳へられ、當代唯一の遺物である。本像は定朝作と傳へられてゐるが、鳳凰堂本尊や淨瑠璃寺本尊に比べると、表現、手

法とも多少異り、兩像より時代が遲れてゐるのは建築と聯關してゐる事でもあるが、淨瑠璃寺の八體と同じ調子を持つてゐる所から、定朝の弟子の作か、或は定朝晩年の作かもしれない。何れにしても古來鳳凰堂、淨瑠璃寺のものと共に、定朝の三傑作と稱せられ、當代の代表的遺物である。峰定寺の吉祥天は、淨瑠璃寺のに比べて、寧ろ清楚とも云ふべき作であるが、面相は優美を極めてゐる。淨瑠璃寺のもの及び法隆寺金堂のものと比較研究の好材料である。廣隆寺の十二神將は、定朝の弟子たる長勢の作と傳へられ、年代は相當してゐる。手法圓熟し、藤初時代末期の特色を供へてゐる。萬壽寺、圓成寺、當麻寺講堂等の阿彌陀如來は、何れも當代の特色を持つてゐる。猶一つ附加へて置きたいのは、一條天皇の永延元年(宋の大宗雍熙四年)、僧奝然によつて將來された清凉寺の釋迦像の事である。これは當時の我が國の佛像とは全然違つた樣式のもので、衣が兩肩を被ひ、衣の襞は數多く重り合つてゐる。

この樣式の系統については種々說もあるが、印度から支那に入つたもので、衣の襞が無數に重つてゐる所は形式派のものである事を示してゐる。而してこの樣式は、あまり我が國へ影響を與へず、極めて小數の遺物を存するのみである。

神像と肖像

神像は前代からぽつぽつ神社に安置せられたが、當代となつて延喜年間に數千の神像を刻んで全國の神社に分配された事が「延喜式」に見えてゐるから、多數の神像の出來た事は明かである。尤もそれは比較的簡單のもので、佛像の如く精巧のものはないが、幼稚のところに趣がある。次に肖像は、法隆寺東院繪殿安置の聖德太子七歲像が有名である。胎內に銘があつて、佛師僧圓快、繪師秦致眞が作り、治曆五年の作で、もと聖靈會の本尊であつた。猶同寺聖靈院にも聖德太子像があるが、それは藤末時代のものである。

四　繪畫

概觀

當代の繪畫は、建築、彫刻と同じく同化の傾向が著しく、日本趣味のものが現はれた。種類も佛敎畫の外、山水畫、人物畫、風俗畫、歷史畫等の非宗敎畫が現はれた。而して佛敎畫には淨土敎に關するものが多いが、その中にも彌陀來迎圖の如きは、多くは自然の背景を有し、それは同化の現れと見る事が出來る。非宗敎畫の發達は、寢殿造の發達に伴ひ、其の室內裝飾として用ひられ、又國文學の勃興につれて起つたものと考へられる。又自然と接觸する當代の趣味の上から、山水畫が行はれ、佛畫にさへ自然を結合したものが現はれた。次に系統的に專門畫家の輩出した事も彫刻と同樣であるが、それは項を改めて述べやう。

主なる畫家

專門畫家の外に、僧侶で畫をよくする者のあつた事は彫刻と同樣である。惠心僧都は最も有名で、其の傑作は高野山の二十五菩薩來迎圖である。これは僧都の傑作であるばかりでなく、當代の代表作で、我が國佛畫の最大傑作の一つである。僧都は他力念佛を說いた最初の人で、今日ある來迎彌陀の圖は、大抵僧都の筆と傳へられるが、前記高野山のもの丶外は何れも確證なく、多くは年代も下るものである。會理僧都は彫刻にも長じてゐたが、佛畫にも巧だつたと傳へられてゐる。次に專門畫家として、前代の大家巨勢金岡の子に、相見、公忠、公茂の三人がある。何れも相當の大家であつた。公忠の子に公茂(公望ともかく)がある、從來の寫生風を一變して理想化した事が『古今著聞集』に出てゐる。公茂の曾孫(孫とも云ふ)に廣高(弘高とも書く)がある。道長時代に腕を振ひ、其の巧であつた事は『今昔物語』に出てゐる。この一家は所謂巨勢派をなすもので、公忠以下皆繪所長者に任ぜら

れ、世襲的に畫家を職業とした。巨勢派の廣高と時代を同じくし、之れと肩を並べたのは托摩爲成である。『今昔物語』によれば、宇治殿の別莊の繪を描いたといふ事で、從來鳳凰堂の扉繪も爲成の筆と傳へられてゐるが、これは疑問である。又爲成を托摩派の祖とする說もあるが明かでない、併し爲成が大家であつた事は確である。藤原基光は白河天皇の時、從五位內匠頭となり、繪所長者に任ぜられ、土佐派の祖となつた人である。藤初時代から藤末時代へかけての大家であつた。僧侶で畫に巧な珍海は其の子であつて、藤原隆能も其の子とする說(土佐派の系圖)もあるが確ではない。

壁畫の遺物

次に當代繪畫の遺物を述べるが、先づ壁畫に立派のものが三つある。それは醍醐寺五重塔と、鳳凰堂と、法界寺阿彌陀堂とである。

醍醐寺五重塔は、前述の通り天曆五年に出來たもので、內部の壁畫は、繪畫としては大したものでもないが、建築と同時で、年代の確かな標準作として

貴重なものである。その繪は二種で、一つは中心柱を四方から板で圍つて、四方に胎藏界曼荼羅の一部を描き、他の一つは四方の羽目板に、上方に十體づゝの佛像、下に眞言八祖像を描いてある。描線は細くして流暢で、黄や赤の彩色を用ひ、體には赤の隈取があるが、弘仁時代に比べると餘程優雅になつてゐる。鳳凰堂も建築の項で述べた通り永承七年に建てられ、壁畫も同時のものであるから、年代が確であり、しかも繪畫としても優秀の作で、托摩爲成の筆と傳へられてゐるが、それは猶研究の餘地がある。扉と壁と兩方にあるので、扉の方には菩薩、天人、山水等を描き、四方の壁には淨土曼荼羅、九品淨土等が描かれてゐる。本尊の面部、其の他肌を金泥で描き、他は朱、綠青等の色彩を用ひ、衣文には細い線を重ねてゐる。さうして佛菩薩の面相優美に、衣文等は纖麗である。又扉の方の背景に山や樹木が描かれてゐるが、山は綠青で塗り、樹木の幹や枝は墨で描き、葉には綠青が用ひてある。之等

の手法は土佐繪の源泉をなしたものと考へる事が出來る。法界寺阿彌陀堂は、建築の年代が不明なので、從つて壁畫の時代も不明であるが、建築と同じく恐らく當代末期のものであらう。本尊の上の小壁に、天人、樂器などの飛んでゐる樣を描いてあるが、それは漆喰の上へ直ちに繪具で描いたもので、鳳凰堂のが漆喰の上へ胡粉を塗つてから描いたものと違つてゐる。比較的よく保存され、天人の飛んでゐる姿が頗る巧に、衣の靡いてゐる樣もよく現はれてゐる。天人の畫としては、法隆寺金堂の天蓋にあるものについで貴重な遺物で、後世天人の繪の模範となるものである。猶大原三千院の天井に二十五菩薩が描かれ、彌陀三尊の後壁に兩界曼荼羅が描かれてゐる。恐らく建築と同時(寛和元年)のもので、當代初期に屬するが、剝落が甚しい。

高野山聖衆來迎圖

淨土教の發達と共に彌陀來迎圖が多く描かれたが、其の代表的傑作は、もと叡山にあり今高野山の所有に歸し、高野山靈寶館の紫

雲殿に特別陳列されるもので、惠心僧都の作として最も信ずべく、今は三幅となつてゐるが、もとは一幅で、可なりの大作である。中央に大きく彌陀の座像を描き、それをとりまゐて觀音、勢至を始め、諸菩薩が雲中に描かれ、左の下の方には岩石と樹木とが現はされてゐる。構圖雄大にして、本尊其の他の姿勢も各々比例よく、面相は圓滿優美の內に森嚴の氣宇を有し、彩色豐麗、本尊の衣文には截金(きりかね)を用ひ、益々華麗さを發揮してゐる。截金とは細微の金線を貼する事で、正倉院御物にも發見されるが、主に當代から行はれ、殊に繪畫に應用する事は當代からで、藤原、鎌倉時代には盛んに佛畫に用ひられ華麗の效果を助けてゐる。此の來迎圖は實に當代の大傑作であるばかりでなく、我が國佛畫中の代表的傑作である。

其他の遺物

次に當代繪畫の遺物の主なものを列記し、簡單に說明して置かうと思ふ。

東寺觀知院閻魔天像
法華寺彌陀三尊及童子像
長法寺金棺出現圖
原氏孔雀明王
東京帝室博物館普賢菩薩
益田氏十一面觀音
高野山涅槃圖
東京美術學校厨子扉繪

東寺觀知院の閻魔天は、會理僧都の作と傳へられるもので、時代は當つてゐる。まだ弘仁時代の特色も殘つてゐるが、藤初時代の優美の兆を帶びてゐる。法華寺の彌陀三尊及童子像は三幅で、一幅に本尊、一幅に觀音勢至、一幅に童子が描かれてゐる。本尊は雄大で、觀音勢至が自由に面白く出來てゐ

る。この二幅と童子の幅とは筆者も異り、時代も童子の方がやゝ下つてゐるらしい。長法寺金棺出現圖は、釋迦が再生して金棺から出現し、説法する樣を現はしたもの。構圖奇拔で、彩色も美しく、截金を用ひてゐる。原富太郎氏藏の孔雀明王は、色彩豊富で截金を用ひ、優美纖麗を極め、しかも構圖端嚴で氣品頗る高く、當代の特色を發揮した傑作である。東京帝室博物館の普賢菩薩は、前記の孔雀明王にも優る優美纖麗のもので、第一に白象に乘つた構圖から孔雀明王のやうに端嚴でなく、よく藤初時代中期以後の特色を現はしてゐる。益田孝男の十一面觀音は、もと大和法起寺にあつたもので、彩色豊麗を極め、截金を用ひてゐる。面相の表現やゝ強く、顏や手足に朱の隈取があつて、すべて調子が古く、恐らく藤初時代初期のものであらう。高野山涅槃圖は、應德三年四月十七日奉寫已畢と書いてあるので年代が確である。色彩豊富で、佛菩薩の面相は優美を極めてゐる。藤初時代末期の代表作であ

る。東京美術學校藏の厨子は、前に淨瑠璃寺にあつたものである。彫刻の所で述べた吉祥天女像の厨子で、その扉に梵天、帝釋、四天王を極彩色で描いてある。比較的古い調子はあるが、それは古いものを寫したからであらう。始めは天平時代のものと考へられたこともあるが、彫刻と共に當代のものである。

五　工藝美術

概觀

當代の工藝美術は、建築と彫刻の發達に伴ひ大いに進歩した。殊に佛教に關するものは、佛寺が朝廷や貴族によつて建てられた淨土教のものが多いので、豊麗な裝飾を必要とする所から大いに發展したのである。非宗教的のものも、寢殿造の大成と共に、其の裝飾、調度として發達した。技巧の種類としては、金工、木工、漆工、螺鈿、象眼、染織工等すべ

て進歩し、殊に織工は、宇多、醍醐兩朝の奬勵、貴族の服裝の爲め發達した。當代の婦人の禮裝としては、五衣や十二單衣が行はれ、色彩の配合には最も苦心し、四季によつて色を變へ、花との關係を考へ、自然の愛を服飾に結び付け、日本趣味を發揮した。

鳳凰堂の遺物

平等院鳳凰堂は、既に述べた如く、建築、彫刻、繪畫とも當代の代表的遺物を持つてゐるが、其の裝飾、器物等は立派な工藝美術である。先づ屋上の銅鳳は翼をたて尾をあげた姿勢がよく、扉の八双金物は形がよく寶相花の毛彫を施し、共に金工として優秀なものである。次に佛壇は黑色の漆を塗つた上に螺鈿を施したものであるが、螺鈿は痕ばかりで少しも殘つてゐない。本尊の天蓋は大體木造で、内部を折上組入天井とし、褐色の漆を塗り、寶相花を螺鈿で現はし、軒は唐草模樣の透彫で、更らに透彫の垂れを下げてゐる。これらの透彫の圖案は頗る流暢な線を用ひ、手法巧に、

木工としては頗る傑れたものである。本尊の光背は所謂飛天光で、飛んだ天人を圖案化して透彫としたものである。臺座も蓮瓣の下に更らに幾重にも蓮花、蓮瓣を彫刻した臺を重ね、それに彫刻を施し、臺座として立派なものである。

其他の遺物

鳳凰堂内にある譯ではないが、平等院の鐘は、例の「音は三井寺、銘は神護寺、形は平等院」といふ日本三名鐘の一つで、形は其の點で三名鐘に入る丈け頗る比例よく、外部の模樣の唐草、天人、獅子等もよく出來てゐる。佛像の光背と臺座は木工としてみるべきものであるが、飛天光の遺物としては、法界寺阿彌陀堂本尊のもの、法隆寺大講堂藥師三尊のものなど傑れてゐる。臺座は前に述べた形式のもので、鳳凰堂本尊の外、法隆寺大講堂藥師三尊、法界寺阿彌陀堂本尊、淨瑠璃寺本堂本尊、法隆寺夢殿の彌陀等がある。金剛峯寺の經唐櫃は、脚のついた唐櫃で、澤に菖蒲の花が咲き、

これに鳥を配した意匠で、蓋は別の模樣となつてゐる。何れも蒔繪に螺鈿をなし、澤の有樣が寫生風に優美に出來てゐる。當代の特色をよく現はした代表的遺物である。法界寺阿彌陀堂の卷柱については、前にも述べたが、漆塗の上に唐草模樣と菩薩の像を描いてゐる。織工品としては仁和寺に三條天皇の第四王子性信法親王の横被に寶珠文及び七寶文の倭錦がある。何れも色の種類が多く、配合も巧に出來てゐる。瓦には巴瓦に巴の形の最も初期のものが現はれ、劍巴の唐草瓦もある、猶當代の工藝美術品の遺物は澤山あると思ふが今は略して置く。

六　藤初美術の特色と價値

四種の特色

我が國の美術は、天平時代で一つの完成時代、黄金時代を作つたが、それは要するに模倣時代であつて、次の弘仁時代を過渡時代

として、玆に同化時代たる藤原時代を現出した。即ち藤原時代の主な特色は、同化時代といふ所にある。天平時代に於いて全然唐化したものを漸次日本化し、日本趣味を著しく發揮するやうになつたのが藤初時代である。例へば建築に於いて住宅は勿論、佛寺でさへも自然と結合して其の調和を計つたが如き、屋根の勾配を極めて緩にし、檜皮葺を用ひて優美、輕快の表現を持つたが如き、繪畫に山水畫、風俗畫が行はれ、佛畫にすら自然を取り入れたもののあるが如き、何れも其の證をする事が出來る。第二の特色は、貴族的藝術である事であるが、それは當代の佛教が、貴族的佛教である所から來る當然の特色である。第三の特色は、淨土教藝術である事で、これも當代の佛教界に淨土教が勃興した事から當然の結果である。第四に表現上の特色を擧げると、同化、即ち日本趣味の發揮、貴族的、淨土教的といふ所から、優美、輕快、華麗などの特色が擧げられる。これは前代の特色たる幽晦、森嚴から全

く反對の方向に轉じたのである。

同化時代の價値

以上の如き特色を有する藤初美術の價値は、第一に同化時代であるから、從來の模倣を脱し、日本固有の國民性に立歸り、日本趣味を發揮した點にある。藝術に最も尊いのは、云ふ迄もなく獨創であるが、同化は一旦模倣したものを更らに最初の獨創的分子を含む根幹によつて感化するので、換言すれば獨創的分子を含んで居る。具體的に云へば、之れによつて日本固有の國民性が發揮せられ、日本趣味が發現せらるゝのであるから、其の點に大なる價値があり、模倣時代とは全然別種の價値がある譯である。この價値は根本的のもので、最も重要な點である。この意味で鳳凰堂の建築の如きは、最も價値がある。次に貴族藝術である爲めに、豪華の表現を有するものがあるが、これも一つの價値であると思ふ。第三に淨土敎藝術であるから、すべて明るく、優美に、華麗になつた點に價値がある。此の第二、第

三の價値は、實際に殘つて居ないが、記錄上から、法成、法勝二寺の裝飾の如きは、よく之れを代表したものであつたらうと思はれる。現存のものでは鳳凰堂の裝飾や高野山の二十五菩薩來迎圖の如きは、これを代表してゐる。最後に單に遺物として見ても、建築に於ける鳳凰堂、法界寺阿彌陀堂、彫刻に於ける鳳凰堂の本尊、法界寺阿彌陀堂の本尊、繪畫に於ける高野山の二十五菩薩來迎圖の如きは、何れも我が國美術史を通じての代表的傑作である。即ちこれらの傑作を有するだけでも藤初時代美術の價値は頗る大いなりと云はねばならぬ。

第七章　藤末時代

一　時代の大勢

概観

藤末時代は、堀河天皇の寛治元年(一〇八七)院政が始まつてから、鳥羽天皇の建久三年(一一九二)源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの百五年間である。それが藤原時代の後半に當り、最後の二十五六年間が平氏時代であつた事は、前章の冒頭に述べた。藤原時代は院政時代と平氏時代とに分つ事が出來るが、藤初時代から引續き同化時代である。藤原氏の擅權が衰へて、院政時代となりつゞいて平氏時代となつたのであるから、藤末時代と云ふ名は當らないやうであるが、美術の特色から云ふと全く同様であり、又此の時代に當つて、奥羽平泉の地に藤原清衡が居城を構へ、子基衡、孫秀衡と三代七八十年間に渉つて榮華を極め、美術上にも相當の功績を遺してゐるので、この點から藤末時代の名は適してゐると思ふ。

源氏と平氏

前九年の役のあつたのは、藤初時代の末葉であるが、其の際武功を建てたのは、源頼義であつた。當代となり勢頭、後三年の役が起り、これに武功を顯はしたのは、頼義の子義家で、源氏の武力は漸く現はれ、其の潜勢力は關東に根ざした。併し院政の終頃となつて平氏の勢力が高まり、保元平治の亂に於いては、源氏は全く平氏に壓され、清盛は仁安二年(一一六七)太政大臣となり、曩日の藤原氏の如く擅權を極め、豪奢を縦にしたが、永續せず、再び源氏に壓され、文治元年(一一八五)平氏は壇の浦に亡び源頼朝、征夷大將軍に任ぜられ、次で鎌倉に幕府を開くに至り、鎌倉時代が始まつた。斯くの如く藤末時代には、奥羽に西國に兵亂があり、中央には延暦寺や興福寺の嗷訴があり、可なり騷がしい時勢であつた。

陸奥藤原氏の豪奢

後三年の役に義家を救けた藤原清衡は、嘉保元年(一〇九五)平泉に移り、居城を構へ、遠く京都を摸し、十二年を經て、長治二年(一

一〇五)中尊寺を草創し、子基衡は毛越寺を建て、孫秀衡は無量光院を建立した。秀衡の死んだのは文治三年(一一八七)であるから、清衡が平泉に移つてから九十年間となる。この陸奥藤原氏と其の建立した寺院については、後に詳説するが、京都を遠く離れた奥羽の地に一つの美術の中心を作つた事は、別に平氏が、西に嚴島神社を再建し、此處にも美術の一小中心をなした事と共に、これ迄の美術が、奈良、京都附近を離れなかつたのに對して注意すべき現象である。

佛教

佛教は前代の繼續であつて、矢張天台、眞言の二宗が盛んで、それは一面に於いて加持、祈禱、修法の宗教であり、一面に於いて貴族的宗教であり、又他方に於いて僧兵を蓄へ、嗷訴を行ふ宗教であつた。尤も貴族的宗教と云つても、藤原氏全盛の時は既に過ぎ去り、陸奥藤原氏と末期に平氏が榮えた外は、直接皇室に庇護せらるゝ事が多く、所謂六勝寺は

何れも皇室の御願で建立された。即ち白河(法勝寺、尊勝寺)、鳥羽(最勝寺)、待賢門院(圓勝寺)、崇德(成勝寺)、近衞(延勝寺)の六寺で、中法勝寺だけは前代の末期に屬する。これらは前代に藤原氏が道長始め寺院を建立したのと同樣で、必しも國家鎭護の爲めでなく、御一族の冥福を祈らるゝ爲めであつた。此の點は政教一致の天平時代に、聖武天皇が東大寺を國家鎭護の爲め建立されたのとは意味が違つてゐる。天台、眞言の二宗が加持、祈禱、修法の宗教となり、又僧兵どもが嗷訴を事としてゐる間に、淨土教は既に前代に惠心僧都によつて他力念佛の眞意が說かれ、其の末期から當代の始めにかけては、良忍上人が融通念佛宗を弘めた。これは他力教を自力教の眼で解釋したのに過ぎないが、次に現はれた法然上人は、惠心僧都の說いた善導派の他力念佛を弘め、其の門弟に高僧が輩出して、次の鎌倉時代には益々弘まり、別に親鸞上人も現はれて淨土宗を開き、爾來今日に至るまで他力念佛の信仰は全國

に浸潤してゐる。又當代は神佛の融合も益々行はれ、神社と佛寺との關係が密接になつて來た。

文學

文學も藤初時代の繼續であるが、其の末葉に於いて小說が全盛であつた反動として、歌壇が再び隆盛となつた。即ち歌人として、藤原通俊、源經信、子俊賴、藤原基俊、同顯輔、子淸輔、西行法師等が出た。就中西行法師は、前の業平、和泉式部と共に平安朝に於ける三大歌人の一人である。當代に出た歌集としては、『後拾遺集』、『金葉集』、『詞花集』、『千載集』がある。小說には大した作も現はれなかつたが、散文の一種として、國文の歷史の大作『榮華物語』、『大鏡』が前後して著された。漢文にも藤原明衡、同敦基、同敦光、大江匡房、三善爲康、入道信西、藤原賴業等の大家が輩出したが、之等の人も詩文を作るよりも選集に力を用ひ、『東朝文粋』、『續東朝文粋』、『朝野群載』等多くの詩文集が出來た。猶當代の國文には、其の內容に佛

教的思想が多くなつたが、それは神佛融合が文學に影響を與へたものと考へる事が出來やう。序に述べるが、一般の風俗は益々華美柔弱に流れた。鳥羽天皇の頃から强装束の用ひられた事は其の證據である。これは都の京都ばかりでなく、陸奥藤原氏なども京都を摸し、末葉の平氏も同樣であつた。但し地方には武士が潛勢力を養ふと共に、剛健の風も兆して居つたのである。

二 建築

概觀

藤末時代の建築は、全然藤初時代の繼續である。宮殿建築は、前代の頻々たる炎上の後を受け、當代はそれ程炎上はなかつたが、大して造營されたとも覺えない。之れに反して皇室御願の大伽藍の建立多く、佛教建築は大に發達した、所謂六勝寺がそれである。神社建築と住宅建築は、ともに前代の繼續で、別に新しい形式も現はれなかつた。

嚴島神社

神社建築には新しい形式は現はれなかつたが、當代に其の規模を大成した嚴島神社について先づ述べて置く。嚴島神社の創立は、社傳によれば推古天皇時代で、弘仁時代の記錄にも出てゐるから、可なり古い神社である事は確であるが、當代末期に、平清盛が安藝守となり、大に社殿を擴張して再建する迄は、餘り世に知られなかつた。清盛の再建は仁安二年に落成したが、京都に來て勢を得てからも篤く之れを尊崇した。其の後本社殿は貞應二年火災に罹り、安貞元年再建に着手し、仁治二年落成した。然るに毛利元就は、社殿を汚したと云つて、弘治二年再び本社殿を改築した。即ち現在の本社殿で、客神社は仁治二年のものである。斯く屢々再建されたが、其の位置と平面とは、仁安二年清盛が經營した儘であつて、樣式手法も亦當時のものを學んでゐる。即ちこれをこの藤末時代の條下に述べる所以である。此の神社で先づ注意すべきは、云ふ迄もなく其の位置であつて、建築

と自然とを、最もよく調和する位置を選んだ事である。一般に藤原時代は建築と自然の關係が密接であるが、これ程密接の度を强め、大膽に設計されたものは他にない。即ち背景を山とし、前景に海を控へ、左右に延びた陸を持ち、社殿は全く自然のふところに抱かれ、建物は全く自然の一風物と成つてゐる。次に面白いのは、其の全體の平面である。先づ本社と客神社との二部に分かたれ、本社は正面にあつて、本殿の前に幣殿があり、其の前に拜殿、祓殿と一直線上に立つてゐる。客神社は左の方に、本社に向つて殆んど直角に建ち、本殿、幣殿、拜殿、祓殿と一直線上に立つてゐる。猶朝座屋、大國神社、天神社、能舞臺、平舞臺、門客神社、樂房などが附屬し、夫れ等がすべて廻廊でつながれてゐる。即ち本社も客神社も、各々對稱（シムメトリー）を守つてゐるが、全體としては不對稱的な、自由な、しかも複雜な平面なのである。第三に立面も亦複雜を極めてゐる。本社の本殿の屋根は前後に流れた流造であるが、

拜殿は入母屋造となり、祓殿は入母屋造の妻を正面として、軒の中央を一段高くし、廻廊は總べて切妻である。それらが前述の通り曲折した平面に伴うてあるのであるから、全體としては極めて變化に富み、繪畫的意匠の上乘なものである。しかも其の屋根は、勾配の甚だ緩い檜皮葺で、表現は優美輕快を極め、藤末時代の特色をよく示してゐる。加之、細部も組物、蟇股に至るまでよく藤末時代の手法を持つてゐる。而して此の複雜な平面は、佛寺に於ける鳳凰堂と共に、藤原時代に盛に行はれた寢殿造の影響から出來たものと考へられる。即ち內裡建築から寢殿造が出で、更らに佛寺に影響しては鳳凰堂となり、神社に影響しては嚴島神社となつたのであらう。要するに嚴島神社は、現在の建築は、鎌倉時代及び室町時代のものであるが、自然と結合した位置と云ひ、複雜なる平面と云ひ、優美輕快なる立面と云ひ、すべて藤末時代の特色をよく現はし、單に同時代のみならず日本の神社建築として、將

又日本建築全體を通じて最も傑れたものゝ一つである。猶建築としての説明は、鎌倉時代及び室町時代の條下で試みるつもりである。

神社建築遺物

次に當代の神社建築の遺物は四つある。先づ第一は奈良の春日神社南門と廻廊である。春日神社は神護景雲年間の草創であるが、社殿は文久二年の再建で、南門と廻廊に關しては、『春日神社社頭由來』によつて治承三年(一一七九)のものである事がわかる。此の時從來の鳥居と瑞籬とをやめて南門と廻廊に改められたので、それは佛寺の影響である。南門は三間一戸の樓門で、下層の屋根なく、勾欄を廻らしてゐる。組物は腰組は三手先、上層は二手先、屋根は入母屋根で檜皮葺である。全體の恰好もよく、丹塗が青葉と映じて美しい。廻廊は複廊で、組物は三斗、屋根は檜皮葺であるが、改築の部分が多い。次に春日神社の若宮は、長承年間に創建されたもので、其の前の神樂殿も同時の建築であるとの説があるが、治承年間建立との説も

あり、構造様式からは治承年間、即ち藤末時代のものらしい。神樂殿と云つても床の高い普通の神樂殿とは全く異り、床は殊に低く、すべての點が神社建築よりも住宅建築に近く、當代の住宅建築の參考ともなるべき貴重な遺物である。桁行十間、梁間三間、單層、切妻流造、檜皮葺の建築で、組物は舟肘木、軒は二軒、疎垂木である。疎垂木は繁垂木と違つて、垂木を疎(まばら)に置き今日の普通の家と同樣である。これが爲めに非常に輕快な表現を呈する。又一體に木割が細く、組物は最も簡單であるし、屋根は勾配頗るゆるく、且つ流れて居り、檜皮葺なので、其の表現は、優美、輕快、瀟洒を極めてゐる。最後に三佛寺は伯耆國三德山頂にある。寺傳によれば、慶雲三年役行者が開き、後嘉祥二年慈覺大師が山下に伽籃を建て、それが遺つてゐると稱してゐるが、現在ある投入堂と納經堂とは藤末時代のものである。その納經堂は一間社春日造で、小さいが春日造としては最古の遺物である。

佛教建築

佛教建築は、依然として建築界の中心で、皇室御願の大伽藍を始め、多くの寺院が建てられた。今遺物に重きを置いて、主なものを列擧すると、次の如くである。

堀河唐和四年（一一〇二）	尊勝寺	
鳥羽天仁二年（一一〇九	中尊寺	經藏現存
同　？	最勝寺	
同　保安五年（一一二四）	醍醐寺藥師堂	現存
崇德天治元年（一一二四）	中尊寺金色堂	現存
同　？	成勝寺	
近衛仁平年間	豐樂寺藥師堂	現存
同	延勝寺	
二條永承元年（一一六〇）	白水阿彌陀堂	現存

高倉治承二年（一一七八）	高藏寺藥師堂	現存
？	石山寺本堂	現存
？	三佛寺投入堂	現存
？	富貴寺本堂	現存
？	鶴林寺太子堂及常行堂	現存

中尊寺毛越寺其他

中尊寺は陸中一の關の北平泉に在る。寺傳は仁明天皇の嘉祥三年慈覺大師の開基に係り、始め弘臺壽院と稱し、淸和天皇の貞觀元年中尊寺の號を賜はつた事になつてゐるが、長治二年堀河天皇が勅を藤原淸衡に下されて創建になつたのが、『吾妻鏡』や中尊寺古文書によると正しく思はれる。而して堂宇の建築は、天仁元年から始まり、三間四面檜皮葺金堂、二階塔婆三基、二階瓦葺經藏一宇、二階鐘樓一宇、大門三宇等を主とし、金色堂、帝釋堂、辨才天堂、千手院等、『吾妻鏡』に所謂寺塔四十餘宇、禪坊三百

餘宇が建立され、金堂には丈六釋迦三尊、小釋迦百體、四天王等を安置し、五彩切幡三十二旒、三丈村濃幡二旒を以つて飾つた事が供養願文に記されてゐる。供養は天治三年に行はれ、千僧を集め、讀經の聲天に達する許りの盛儀であつたが、現存の建築は、金色堂と經藏の階下に過ぎないのである。かく清衡が中尊寺を建立したのに續いて、子基衡は毛越寺を建てた。この寺も『吾妻鏡』によれば、堂塔四十餘宇、禪坊五百餘宇と傳へられ、金堂には金銀を鏤め、紫檀赤木等を用ひ、丈六の藥師と十二神將を安置し、外に講堂、常行堂、二階惣門、鐘樓、經藏、吉祥堂、千手堂等の名が殘つてゐるが、今は門の礎石、近世再建の小さな本堂があるばかりで、他はすべて亡び、芭蕉の「夏草やつはものどもの夢の跡」の句碑に昔を偲ぶ許りである。猶基衡が建立しかけて沒し、子秀衡功を繼いだ嘉祥寺、基衡の妻の建立した觀自在王院、小阿彌陀堂、秀衡の建立した無量光院(新御堂と稱し、丈六の阿彌陀如來を安置

し、三重寶塔其他を建て、院内莊嚴、悉く宇治平等院を摸したと傳へられる)等もすべて亡び、何も殘つてゐない。以上の中、中尊寺、毛越寺、無量光院の三つが陸奥藤原三代の榮華を代表すべき三伽藍で、當時は諸士人民の邸宅も軒を並べ、平泉は立派の都會を現出したのである。さうして東稻山を東山に、北上川を加茂川に摸し、八阪神社を移し、其の傍に祇園の名があり、清水、稻荷、八幡等の社も移し、すべて藤原氏の榮華に倣ひ、奥羽の地に京都を現はさうとしたのであつた。併し兵燹に罹つて、今は全くその俤もない。

金色堂と經藏

中尊寺には前述の如く金色堂と經藏と二つの遺物がある許りである。經藏の方が主な建築であるが、金色堂の方から述べる。金色堂は、棟札によつて天治元年八月二十日に建立された事が確である。此の建築は、一種變つた性質のもので、清衡が自己の墳墓として、納棺の爲めに建てた墓と厨子とを兼ねた樣なものである。それは規模が頗る小さく、しかも

裝飾が頗る華美で、宛も大佛壇の如く、彌陀三尊を安置してゐながら阿彌陀堂と名づけず、唯印象的に金色堂と名づけた點でわかる。基衡と秀衡が棺を納めたのは、當初の計劃でなかつたらしく(それは三壇の相違及び天井の相違でわかる)單に清衡が自己の爲めに建てた一種の墓標建築である。建築後百餘年を經た時には、大分朽損し、正應元年鎌倉將軍惟康親王によつて套堂が建てられた。修繕は寛永年間、元祿十二年に施され、明治となつて二十七年套堂を修繕し、三十年内部の大修繕を行つた。平面は方三間、單層、寶形造で、内部に床を張り、周圍には椽を廻らしたらしいが、今は套堂の床の爲めわからない。屋根は套堂の下で腐朽してゐるが、丸い細い木で本瓦葺を摸してゐる。當初はこれを銅葺として渡金し、金色堂の所以となつたものと思はれる。軒は二軒、一種の半繁垂木を用ひ、内部に四本の柱を立てゝ内陣とし、柱はすべて圓柱、組物は内外陣とも三斗で、組物間に大きな本蟇股がある。これ

は本蟇股としては古い方で、前代の宇治上神社、當代の醍醐寺藥師堂のものと合せて、藤原時代の三蟇股と云はれる。尤も此の金色堂の蟇股は丈が高すぎて、比例は上乘とは云へない。組物も肘木や斗が高すぎる位である。天井は外陣化粧屋根裏、内陣折上小組格天井となつてゐる。次に裝飾は此の建築の全部を塡めてゐる。先づ建物の内外全部黑漆を以つて塗り、其の上に金箔を置いてある。屋根も當初は金色で、寶庫所藏の中尊寺全盛圖にも金色に描いてある。垂木間、二重の垂木、組物、蟇股等軒廻り全部も金箔を置き、此の方は今もよく殘つてゐる。内陣は長押、貫、組物、蟇股等全部平塵で、其の上に螺鈿で寶相花を現はし、それは殆んど完全に殘り、今も猶美しい光を放つてゐる。又長押の兩端と中央、貫の中央には寶相花を透彫にした金銅の金具を打ち、其の中央には七寶か珠玉かを嵌入した跡がある。天井は外陣の化粧屋根裏は勿論全部押箔で、内陣の小組折上格天井は明治の修繕で金箔が

新しく燦然と光つてゐる。其の格縁の交錯點、及び支輪の下端には金銅の金具を打ち、前者の十字形の中央には珠玉嵌入の跡がある。内陣の四本の柱は、所謂七寶莊嚴の卷柱と稱し、金銅の箍(たが)を圍らす事八段、其の上に鋲を打ち並べ、九帶に分かち、内三帶には四方に一體宛、十二體の大日如來を蒔繪で描き、各圓形の金銅殿の光背を有し、光背の餘地には蒔繪で種々の模樣を現はしてゐる。又光佛のない六帶には螺鈿で、寶相花を現はし、これ等すべて比較的よく保存されてゐる。猶柱脚には金銅の逆蓮がついてゐる。床は後世の修繕で、黑漆が塗つてあるが、當初も恐らくさうであつたらう。以上金色堂の建築、裝飾の大要を述べたが、其の特色を約言すると、第一に他の多くの佛教建築と違つて一種の墓標建築である事、第二に規模が小さく堂内に入れば一個の大きな厨子の如き感のする事、第三に裝飾華麗で、宛も大厨子の如く、建築と云ふよりも工藝美術品の感ある事等である。從つて建築としては、

其の性質、目的が珍らしいといふ事が主な位で、他は裝飾美術、工藝美術として大なる價値があるのである。次に經藏は、天仁元年建立當時のもので、供養類文中に、二階瓦葺經藏一宇とあるものに當るが、建武四年の野火は其の上層を燒き、爲めに單層の建物となり、寛永年間の修繕で、内陣柱、天井等悉く新しくなり、當初の佛は殆んど見られない。平面は方三間で、寶形造、棧瓦葺となつてゐる。正面に一間の向拜を附し、内部に床を張り、外には椽を廻らし、組物は舟肘木、天井は折上格天井である。四本の柱を立て、其の内を内陣とし、八角の佛壇を置き、三方の壁に添うて經架を設けてある。裝飾は當初は立派で、『吾妻鏡』にも、內外陣莊嚴と出てゐる。今でも柱、長押、經架軒先等に彩色が殘り、柱は彩色で卷柱の如く現はし、壁、長押等には寶相花を描いたものらしい。經架軒先は寶相花の花瓣の半分を横に並べ、赤と綠とを主とし、白、黃、黑、青等の色を用ひ、比較的よく殘つてゐる。經架

の柱頭には金銅の蓮瓣をつけ、天井の所々から瓔珞が下つてゐる。此の建築は小さく、原形を存してゐる點が少いので建築上餘り價値なく、唯裝飾が金色堂と比較して一寸面白く、主な價値は內部の佛壇と一切經とにあるがそれは後に說く。

其他の遺物

醍醐寺については、前章に述べたが五重塔が藤初時代のものである外、山上の藥師堂と山下の金堂とが當代のものである。藥師堂は殊に年代が明かで、保安二年正月八日着手し、同五年四月二日供養のあつた事がわかつてゐる。五間四面、單層、入母屋造、檜皮葺の建築で、組物は三斗、內部中央に藤原時代三蟇股の一つである大きな本蟇股がある。屋根の勾配が非常に緩く、優美輕快の表現を持つてゐる。內部の本尊は、藤初時代のものである。金色は慶長年間、秀頼が紀州岩佐から移建したもので、當時の改修が多いが、內陣廻りに藤末の特色が殘つてゐる。覺鑁和尙が長承年間

に建てたと傳へてゐるが確證はない。七間五面、單層、入母屋造、本瓦葺の建築であるが、改修が多いので當代のものとしては餘り價値が無い。豊樂寺は土佐國長岡郡西豊永村に在る。其の藥師堂は四國に於ける唯一の藤原時代の遺物である。仁平年間の建立と傳へられ、樣式上も當つてゐる。方五間、單層、入母屋造、柿葺で、向拜一間は後世の附加物である。內部は三間を內陣とし、天井は外陣化粧屋根裏、內陣は棹椽天井(今日の普通の住宅の天井)となつてゐる。木割が全體に細く、優美の表現を持つてゐる。內陣安置の本尊藥師と脇侍の釋迦と彌陀像も建築と同時代のものである。白水の阿彌陀堂は、磐城の石城郡內鄕村に在る。中尊寺を除いては、東北に珍らしい當代の遺物である。永暦元年國守岩城則通の後室德尼(淸衡の娘と傳へてゐる)が鄕里の金色堂に倣つて建てたと云はれてゐる。白水の名も平泉の泉を分けたと云ふ。樣式上時代は當つてゐる。方三間、單層、寶形造、椽葺の建築で、軒

は二軒、組物は出組、內部は床を張り、方一間を內陣とし、天井は內外陣とも折上小組格天井となつてゐる。尤も內陣は一段高く天井を張つてある。柱は巻柱で、金具は殘つてゐるが、彩色は僅に俤を存する許りである。內陣の格天井には格緣の交錯した所に金具を附し、格間には一つ宛寶相花が描かれてゐる。又本尊の後壁及び三方の壁にも色彩の繪があつたが今は殆んど殘つて居らぬ。これらの裝飾は、中尊寺の金色堂や經藏に似てゐる所があるが、何分剝落が甚しいのは遺憾である。內陣には佛壇を据え、彌陀三尊と二天とが安置されてゐるが、これも建築と同時代である。高藏寺藥師堂は、仙臺の南方、大河原驛南二里弱の所にある。棟札によつて治承二年の建築と云ふ事がわかる。方三間、舟肘木の簡單なもので、唯當代の建築と云ふに止まる。石山寺は近江八景として月に名高い。天平勝寶年間の創立であるが、今の本堂は無論その後のもので、年代は明かでない。承曆二年に燒けた記錄があるか

ら、其後のものである事は確で、様式構造からは當代のものであるが、慶長年間禮堂を附加したので立面は複雜してゐる。本堂は七間四面、單層、四注、檜皮葺の建築で、軒は二軒、組物は三斗で簡單である。當代のものとしては木割雄大、しかも優美の表現を有してゐる。禮堂は桃山時代の特色を有し、本堂と結合して巧妙な立面を作つてゐる。因に所謂源氏の間は、桃山時代の附加の方になつてゐる。三佛寺は納經堂が一間社春日造なので神社建築として述べたが、投入堂は崖の中腹に建てられ、正面四間、側面三間、單層、入母屋造、柿葺の小建築であるが、困難の構造をして崖の中腹に建てられた點が珍らしい。富貴寺は大分縣(豐後)宇佐の東四里にある。其の本堂は九州唯一の藤原時代の建築である。養老年間に建立され、その儘殘つてゐると傳へられてゐるが、構造様式からみると當代のものである。正面三間、側面四間、單層、四注の建物で、組物は舟肘木に過ぎないが、內部の裝飾が貴重なもの

である。天井は內外陣とも小組格天井であるが、それに彩色で模樣を描き、內陣の柱には菩薩や唐草を描き、長押には寶相花を描き、內陣の小壁には佛菩薩、本尊の後方には淨土曼荼羅を描いてある。これらは剝落してゐるけれども猶昔の俤を有し、藤原時代の壁畫として貴重の遺物である。鶴林寺は兵庫縣(播磨)加古郡鳩里村に在る。寺傳によれば用明天皇の二年、聖德太子が秦川勝に命じて建立されたと云ふが、現在の本堂は室町時代の代表的建築で、太子堂と常行堂とが當代の遺物である。太子堂は方三間、單層、寶形造、檜皮葺の小建築で、組物は大斗肘木、軒は二軒、天井は小組格天井、比較的簡單で、木割は細い。中央に佛壇を置き、其の羽目板に獅子の如き繪を描き、又佛壇の前の壁に聖德太子童子二人の繪があり、剝落は甚しいが、當代の繪畫として注意すべきものである。常行堂は正面三間、側面四間、單層、四注、本瓦葺の建築で、太子堂と同時の建築と思はれる。

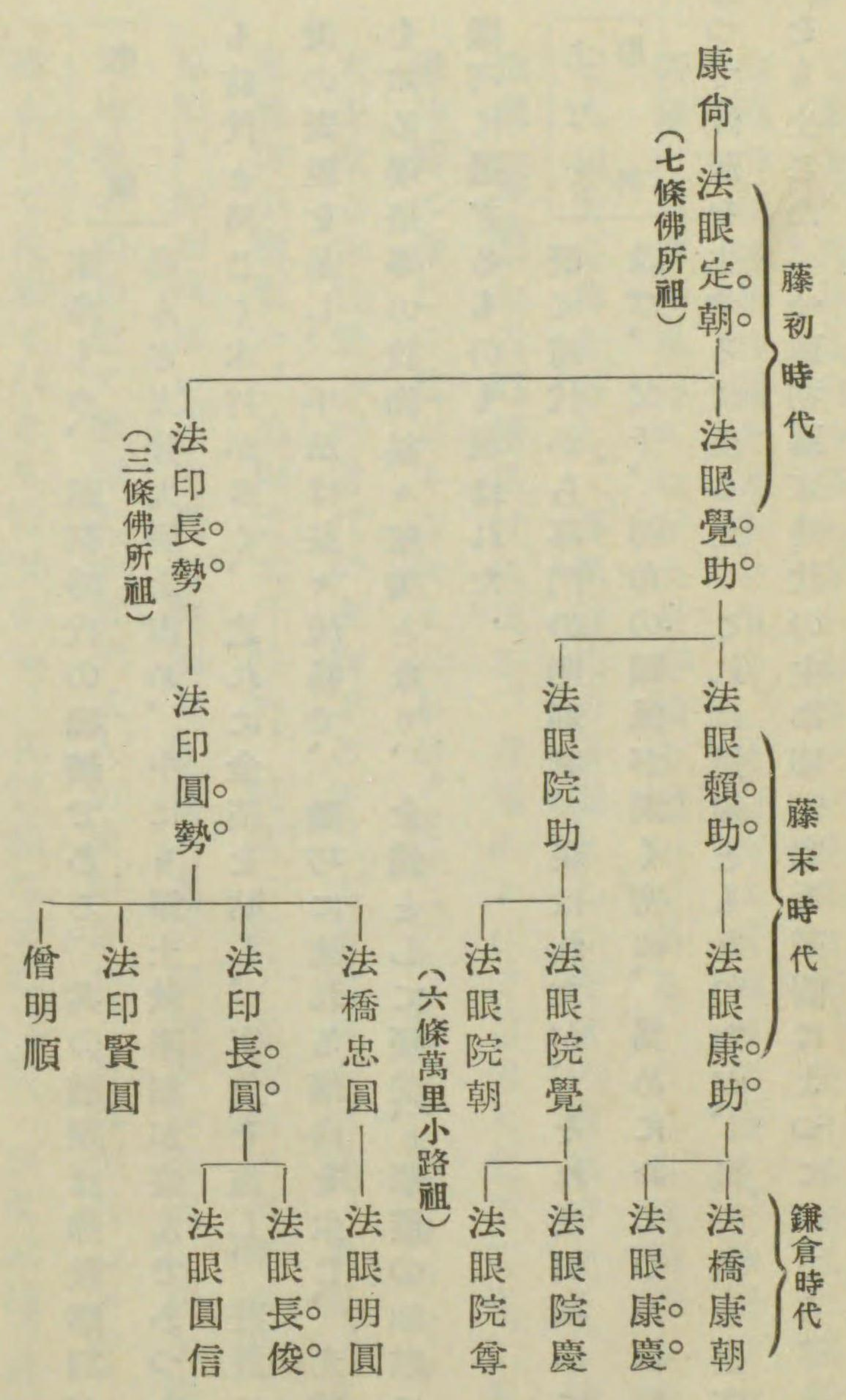
三　彫刻

概觀

彫刻も亦、藤初時代の繼續である。其の種類は佛教彫刻が主で、殆んど九分九厘を占め、中にも淨土敎彫刻が盛んであつた。材料も前代と同じく木材が多く、之れに金箔を貼し、彩色を施し、莊嚴にして優美の表現を呈し、手法は益々流暢で、纖巧に流れる傾向を生じ、光背、臺座を始め瓔珞等の裝飾益々華美となり、全體として優美、華麗の極點に達し、纖巧に過ぎるものも現はれた。

主なる彫刻

既に前代から專門の彫刻家が現はれたが、それは引續いて當代に及び、父子、師弟の關係が漸く密に、爲めにおのづから師法を守つて流派を生ずるに至つた。これは進歩ともなつたが、又師法を墨守する弊をも生じた。今藤初藤末時代の主な彫刻家を系圖によつて示さう。



定朝、覺助、長勢が藤初時代の三大彫刻家である事は、既に述べたが、藤末時代となつては、覺助の子賴助、孫康助、長勢の子圓勢、孫長圓、曾孫長俊の五人が頭角を擢んで、各有名な寺の本尊等を刻んだ。併しすべて定朝によつて大成せられた藤原風のものであつたが、康助の子康慶は、其の作風を一變し、鎌倉風を創め、子運慶、定慶、快慶に至つて、面目を一新するに至つた。藤末時代にはかく大家が出で、何を作つたといふ事も明かにわかつてゐる。例へば、圓勢は寛治八年法勝寺の等身觀音百體、嘉承二年白河法皇の命によつて堀河天皇の爲めに丈六の五大尊像、康和五年法成寺阿彌陀堂の彌陀九體、永久三年法成寺講堂の大威德明王及び白河新阿彌陀堂の彌陀九體を作つたが、確かな遺物は殆んどない。

佛像遺物

斯く作家の確かなものはないが、當代の遺物は相當にある。今主なものを擧げてみやう。

法金剛院阿彌陀像
大山寺阿彌陀堂阿彌陀像
峰定寺千手觀音像
白水阿彌陀堂彌陀三尊及二天像
豊樂寺本堂藥師及釋迦彌陀像
中尊寺一字金輪像
七寺本堂彌陀三尊像
大原三千院本堂彌陀三尊像
東大寺四天王像
富貴寺彌陀像
興福寺中金堂四天王像
三佛寺投入堂藏王權現像

渡岸寺十一面觀音像
安養寺彌陀三尊像

法金剛院は京都府葛野郡花園村に在る。其の建築は鳥羽天皇の大治五年待賢門院によつて落慶せられ、阿彌陀像も同じく待賢門院の御願で、同年の作と傳へられてゐる。面相優美を極め、蓮座は纖巧で、一面に寶相花の彫刻を施してある。この面相の表現や蓮座の裝飾は、よく藤末時代の特色を示してゐる。大山寺は鳥取縣西伯郡大山村に在る。其の阿彌陀堂(常行堂)は五間四面、單層、四注、柿葺の建物で、本尊阿彌陀如來は、内部の木札に天承元年再興としてあるが、恐らく其時の新作であらう。面相の表現優美、當代の特色を供へてゐる。峰定寺は京都府愛后郡花背村にある。千手觀音は面相優美、衣文の手法は頗る流暢、頭には銅板透彫の寶冠を戴き、頸から胸へかけては瓔珞を掛け、光背も寶相花の透彫で、蓮座にも寶相花の彫刻を施し、其の蓮

瓣にも瓔珞を下け、總べて優美纎巧を極め、蓮座には截金さへ用ひてゐる。面相の表現、衣文の手法、附屬品に至るまで總べて當代の特色をよく現はした代表作である。白水の阿彌陀堂については建築の條下で述べたが、彌陀三尊二天とも建築と同時、即ち永暦元年のものと見られる。彌陀は光背、蓮座とも完備し、面相の表現、衣文の手法、光背の透彫等當代の特色を有し、二天は比較的勇壯の狀を現はし、幾分時代の特色を帶びてゐる。豊樂寺本堂についても前に述べたが、三尊とも建築と同じく仁平年間の作で、作風はやゝ異色を有し粗雜の點がある。中尊寺には金色堂始め佛像は多いが、當代のもの少く、中には確かな當代の光背や天蓋や蓮瓣はあるが、完全な佛像としては、一字金輪像たゞ一體丈けである。これは、古來俗に生膚（ひとはだ）大日と稱され、木佛肌膚温々如生人雲慶作也と文獻にあるが、この雲慶と云ふのは、玉眼が運慶に始まるといふ説があつて、此像に玉眼のある所から云つたもので、當

代の作である。面相、姿勢とも端嚴であるが、それは主題が眞言秘密の本尊なるが爲めで、弘仁時代の趣もあるが、優美の點あり、殊に顔面にやゝ紅味を帶び、生膚（ヒトハダ）と云はれる所以である。猶透彫の寶冠、頸飾、光背、蓮座、厨子等すべて當代の特色を有し、立派な工藝品である。七ツ寺は名古屋市門前町にある、本尊は玉眼ある丈六の彌陀座像で、當代末期の特色を持つてゐる。大原三千院の建築は、前章に述べた通り、藤初時代のものであるが、內部の彌陀三尊は藤末時代のものらしい。脇侍の跪座してゐるのが彫刻としては珍らしい、恐らく繪畫の影響を受けたものであらう、惠心僧都作と云ふのは疑問である。東大寺四天王像は、胎內に札があつて、治承二年の作である事が確かな作であるが、優れたものではない。當代末期の天部彫刻として致方もあるまい。富貴寺については、前に述べたが、其の本尊彌陀も當代のもので、破損してゐるが、面相の表現は優美に、衣文の曲線は流暢に、よく當代の特

色を現はしてゐる。

大分の石佛

支那や印度には石佛が非常に多く、彫刻遺物と云へば、主として石佛であるが、我が國には比較的少く、漸く近年諸所に發見された中でも、大分縣のものは最も多數で、時代も當代を中心とし、やゝ上るもの又はやゝ下るものが多いので、便宜上玆に述べる。大分のも諸所に散在してゐるが、最も主なものは、臼杵町の深田及び背尾にある。前者は大日如來を中心とした四佛、四菩薩、二明王、二天の一群と、俗に隱れ地藏と云はれる尊名不詳の三尊佛と彌陀三尊で、彌陀三尊は面相優美、深田石佛中の大作で、當代のものらしく、大日如來の一群はやゝ古く、名稱不詳のものはやゝ遲れる。後者は多門天、十一面、彌陀、藥師、千手觀音の五尊が並び、俗に岩權現と稱される、當代の特色を持つてゐるが、後世俗惡な赤色を塗つたので感じが惡い。

佛像と肖像

當代も前代に引續いて神像は相當に作られたが、美術的價値あるものは尠い。肖像は甚だ尠いが唯一つ有名なのは、法隆寺聖靈院の聖德太子及脇侍像である。これは聖德太子を中心に、右に山背大兄王と殖栗王、左に卒麻呂王と惠慈法師の四像が並んでゐる。太子の像は天仁年間に作り、保安二年十一月開眼した事が記錄にある、繪殿の太子像に遲るゝ事四十年である。唐服を纏ひ、冠を戴き、笏を執つて端座した姿で、面相はよく太子の崇高な人格を現はし、衣には當代に共通の文樣を截金で現はしてゐる。脇侍の四像は、山背大兄王は如意、殖栗王は念珠筥、卒麻呂王は太刀、惠慈法師は香爐を持ち、如意は黑漆の柄、念珠筥は平塵で寶相花を現はし、太刀は鳳凰の蒔繪で、何れも工藝品として貴重のものである。香爐は後世のもの臺座は何れも元祿の再製に係る。この像は肖像の尠い當代の遺物として珍らしく、五像五樣の表現が面白い、猶別種のものに、嚴島神社の舞樂面と、同

54
63

社藏の木彫獅子と馬とがある事を附記して置く。

四　繪畫

概觀

藤末時代の繪畫は、大體前代の繼續であるが、建築や彫刻が單に前代を繼續し、其の以外に出ないのと異り、佛教畫、殊に淨土教を題材とする畫の外、末葉に至つて風俗畫、歷史畫、物語畫の類が勃興し、其の形式は多く横卷で、所謂繪卷物と云はれるものである。而してこれは佛教畫とは全く違ひ、其の題材、樣式手法を異にし、所謂大和繪と稱するもので、其の萠芽は前代にも見られたが、當代になつて明かとなつた。猶その大成したのは、次の鎌倉時代であるが、兎に角、繪畫が建築や彫刻と違つた點は注意すべきである。これは繪畫史上の一轉化であるが、建築や彫刻より進んだとみるよりも、一歩遲れて日本趣味を發揮したと見るべきであらう。

54
6

主なる畫家

專門的の畫家は、既に前代から現はれたが、當代は其の傳統を繼續すると共に、新しい系統をも生じた。これを略記すると、巨勢派は弘仁時代の金岡を祖とし、前代には大家廣高が出たが、當代の是重、信茂、宗茂など子孫相繼いで振はない。托摩派は前代の爲成を祖とする説もあるが疑はしく、當代の末葉に托摩爲遠といふ佛畫の大家が出で、鎌倉時代となつて勝賀、澄賀の二大家が出てゐるが、何れも傳統は明かでなく、唯托摩派に屬する畫家として取扱はれてゐる。土佐派は藤原基光を祖とし、其の子には珍海がある。又藤原隆能を其の子とする説(土佐派系圖)があるが明かでない。隆能は近衛天皇の時代に繪所長者となり、鳥羽院の御肖像を描いた事が記錄にあり、現存の源氏物語繪卷の筆者と傳へられてゐる。土佐派の大家である事は確かで、其の子に隆親、孫に經隆がある。經隆は土佐權守となり、玆に土佐派の名が生じたのである。當代第一の大家藤原光長も土佐派に屬し、

後白河院、高倉天皇の御用をつとめ、現存の伴大納言繪巻は其の筆と傳へられてゐる。光長と同時代に肩を並べたのは、藤原隆信である。寫生に巧に日枝や平野の御幸に公卿の相貌を描かしめられた。前述の藤原隆能の子隆親は、始めて春日神社の繪所を預る畫家となり、春日派の名が起つた。其の親の隆能、子の隆能ともに土佐派に屬する所からみると親子でも多少畫風を異にしたのであらう。尤も此の時代の各派は、後世の圓山派とか南宋畫といふやうな樣式、手法に著しい差はなかつたらしい。尤も托摩派は主として佛畫を描き土佐派、春日派は主として大和繪を描いた。以上各派の外に在つて、當代の畫界に獨特の地位を持つたのは、鳥羽僧正である。大納言隆國の子で、僧侶となり覺猷と云ひ、保延四年天台座主となつた。性磊落で畫に巧に、鳥羽に住んだので鳥羽僧正と云はれた。高山寺の鳥獸戯畫や信貴山緣起は其の筆と稱されてゐる。

佛畫遺物

當代の壁畫は、既に建築の條下で述べた通り、富貴寺本堂と鶴林寺太子堂とにある。何れも落剝が甚しいが、當代の壁畫としては貴重なものである。壁畫以外のものでは、來迎圖が數圖ある。中で二十五菩薩來迎圖としては、禪林寺と興福院のものがある。何れも高野山のものに比べては小さいが、小さいながらに構圖おもしろく、優美で當代佛畫の特色を現はしてゐる。山越の來迎圖には、金戒光明寺と禪林寺のものとあるが、これは彌陀が山を越して來る樣を描はし、自然と佛像とを結び付けた所が面白く黒ずんだ山の上に金色の彌陀の描かれた色の對照、山上に現はれた彌陀の雄大な氣分等は此の圖の特色である。何れも截金を用ひてゐる。單純な來迎圖としては長谷寺のものがある。涅槃圖には新藥師寺のものがある。この圖は周圍を切取つたもので、佛の面相は優美一點張でなく、やゝ鎌倉時代の風があり、宋から將來したといふ說もあるが、高野山のものより遲れ、當代末

葉のものらしい。普賢菩薩像に鳥取縣八頭郡富澤村の豐乘寺のものがある。剝落してゐるが、當代の特色を有し、光背の唐草模樣には截金を用ひ美事なものである。次に曼荼羅としては、中尊寺の最勝王經曼荼羅と高野山血曼荼羅とが有名である。最勝王經曼荼羅は、辨財天堂に藏してあるもので、十幀に分かたれ、金泥の細字で最勝王經を十界寶塔の形に書き塡め、塔の兩側の餘地には、其の經文に聯關した繪が描いてある。人物、草木、鳥獸、家屋、橋梁など自由な構圖で、色彩も赤、黃、綠、朱、金などを用ひ、佛菩薩は比較的叮嚀に描いてあるが、他の人物や自然は寧ろ粗雜にして幼稚な筆致である。尤も人物は可なり活躍してゐる。此の曼荼羅は裏書によつて藤原三代當時のものである事が明かである。高野山の血曼荼羅は、金剛界と胎藏界と二幅あつて、淸盛が自身の血を繪具に混じて描いたものと傳へられ、優美纖麗、當代末葉のものである。最後に佛畫としては趣の變つた、寧ろ自然や風俗を

54
6

描いた經卷口繪と扇面寫經とを擧げて置かう。經卷口繪は、中尊寺經藏と嚴島神社とにある。前者は淸衡の納めた金銀泥交行の一切經、基衡の納めた金泥一切經、ともに一卷毎に表紙に金泥で寶相花の模樣を描き、見返しに口繪を附けてある。繪は佛、菩薩、山、水、月、松、蓮、其の他草木、水鳥、孔雀、象、多寶塔、入母屋造、舟などを金泥の線で描き、山の外暈しを用ひず、雲や木の葉には銀を用ひ、人物、山水、鳥獸等皆寫生風で、比較的幼稚な筆致ではあるが、中々活躍してゐる。後者は淸盛始め平家一門の寄附したもので、其の軸など頗る美事に、匣の裝飾も立派な工藝品であるが、繪は其の見返しに描かれ、山水、人物、佛像等が頗る優美纖麗を極め、前者がやゝ粗野の調子を帶びてゐるのとよい對照をなしてゐる。扇面寫經は、四天王寺、法隆寺、西敎寺、東京帝室博物館其の他個人の有にもあるが、四天王寺が最も多く、何れも平氏時代前後のものである。扇面の上に優美な風俗畫又は風景

畫を描き、その上に法華經の文句を書いたもので、風俗畫は概して貴族の生活を寫してゐるが、まゝ平民の風俗を描いたものがある。其の手法は當時の繪卷と同樣で、人物の顏は所謂引目鈎鼻である。この繪の大體の輪廓は木版で摺り、其の上に極彩色を施したものである。其の優美な點は當代をよく代表してゐる。

繪卷遺物　繪卷物の遺物には、當代末期か鎌倉時代初期か區別し兼ねるものが多いが、先づ當代のものとして確かなものを擧げやう。源氏物語繪卷は、普通隆能源氏と稱し、藤原隆能の筆と傳へてゐる。詞書は伊房、雅經、寂蓮等の合筆と稱し、いづれも確證はない。もと五十四帖が完備してゐたのであらうが、今は德川義親侯に三卷、益田孝男に一卷藏されてゐる。名に示す如く源氏物語を描いたもので、當時の朝廷、貴族の生活を主とし、自然もその間に描かれてゐる。人物は引目鈎鼻の手法で、用筆纖柔、色彩豐

54 6.

麗、裝飾的の繪卷として、最も古く、又最も傑れてゐる。志貴山緣起は、朝護孫子寺の緣起を描いたもので、三卷とも同寺に藏されてゐる。筆者は鳥羽僧正覺猷の筆と稱されてゐるが確證はない。治承二年燒けた前の大佛殿が描かれてゐるので、製作の時代もほゞわかる。源氏物語繪卷と違つて、勁い骨線を主とし、よく活動の狀を現はしてゐる。これは當代繪卷の對立せる二手法を示すもので、此の骨線を有する手法が、多く鎌倉時代の緣起、畫傳に用ひられる。即ちこれが其の起源となつたものである。鳥獸戲畫卷は、高山寺にある、戲畫三卷繪本一卷で、戲畫の中二卷は猿兎狐蛙等、一卷は人物の遊戲を描き、繪本は樣々の鳥獸を寫してゐる。すべて白描で、筆致勇健、動物の活動は實によく描かれ、樹木岩石の皴法は大和繪の典型である。古來鳥羽僧正の筆と稱されてゐるが確證はない。伴大納言繪卷は三卷あつて酒井忠克伯に藏されてゐる。大納言伴善男が應天門を燒き、其の罪を左大臣源信に負

54
6

はせ、事顯はれて流刑に處せられた物語を描いたもので、源氏物語繪卷と異り、殺伐な事實を描いたものだけに、すべて寫生風で、描線は勁く、人物活躍し、彩色も放膽である。筆者は普通光長と稱されてゐるが確證はない。其の他餓鬼草子、地獄草子、病の草子等も當代末葉とも云はれるが、鎌倉初期と見る方が正しいであらう。

五　工藝美術

概観

藤末時代の工藝美術は、全然藤初時代の繼續であつて、大に進步發達した前代を受け、益々優美纖巧のものとなつた。第一に建築に附隨したものは、優美な建築の裝飾として技巧の妙を盡した、金色堂の如きは好例で、建築そのものが工藝美術と見られる位である。第二に彫刻に附屬したものも、彫刻が優美纖巧となるにつれて其の傾向を高めた。第三に獨

立した工藝美術も同樣であつて、すべての種類の技巧が發達を示した。

中尊寺の遺物

中尊寺は當代工藝美術の寶庫である。まづ金色堂の裝飾が、漆と蒔繪と螺鈿と珠玉嵌入と透彫の金具とで立派な工藝美術であるが、既に建築の條下で述べた。佛壇は金色堂に三個、經藏に一個ある。前者はすべて方形であるが、裝飾の性質、手法は多少異つてゐる。中央壇(淸衡の分)最もすぐれ、格狹間の中には金銅の羽目を入れ、羽目板には孔雀と寶相花とを打出とした金銅板を打ち、格狹間の周圍の貫と束との餘地には寶相花と蝶の飛んだ樣を毛彫で現はし、上下の貫及び束にも金銅板を附し、それにも一面寶相花を毛彫とし、花の中心には珠玉又は七寶嵌入のあとがあり、束と接する上下には、寶相花透彫の金具がつけてある。左右壇では格狹間の周圍に寶相花唐草を螺鈿で現はしてゐる外、勾欄にも差がある。經藏のは八角で、全體に黑漆を塗り、格狹間の中には伽陵頻迦を打出した金銅板を附し、其の周

園、貫と束との餘地には、螺鈿で寶相花、散蓮花を現はし、更に貫には角に當る所に手彫で三鈷を現はし金銅の金具を附し、一邊の中央には螺鈿で三鈷を現はし、散蓮花を螺鈿し、束には矢張螺鈿で、鈴鐸と散蓮花とを現はし、貝に毛彫を施してある。金色堂の三壇とも亦異つた裝飾で、立派のものである。寶庫にある舍利寶塔は、三尺餘の小塔で、建築の參考ともなるが、毛彫、打出等の裝飾があり、工藝美術品としても面白いものである。佛像附屬品としては、一宇金輪像の寶冠と胸飾が、寶相花を透彫にした精巧なもので、他に背光、天蓋、蓮座等皆木工である。華鬘は三枚あるが、何れも金銅で、寶相花を透彫とし、左右に伽陵頻迦の打出を表裏につけてある。幡頭も金銅のものが三個ある、何れも寶相花を透彫とし、大きい方の中央には天人の打出を附けてある。猶金工として磬があり、螺鈿には卓、磬架、燭臺、禮盤、經匣等がある。

其他の遺物

佛像附屬の工藝、即ち光背、臺座、寶冠、頸飾、胸飾、瓔珞の類は當代の彫刻には皆多少あるが、峰定寺の千手觀音の如きは代表的のものである。白水阿彌陀堂の彌陀三尊二天の光背、臺座も完備してゐる。華鬘は中尊寺の外、教王護國寺に獸皮に彩色を施したものがある。寶相花唐草の中央に紐を結び、左右に伽陵頻迦を現はしてゐる。嚴島神社の經卷の軸は水晶で作られ、其の端は圓や角や寶珠形や五輪形や三十餘卷一々意匠を異にし、緣金物も、唐草、竹、龍、三鈷、巴其の他の模樣を透彫にし優美を極めてゐる。又匣には銅で龍と雲の金具を附け、龍の彫刻は頗る美事である。

六　藤末美術の特色と價値

特色ある繪畫

藤末時代は大體に於いて藤初時代の繼續であるから、藤初美術の特色と價値も大體同樣で、前章の末節に述べた所と重複するやう

なものであるが、多少の相違はある。即ち建築、彫刻、工藝美術等は大體前代の特色を繼續し、唯優美、華麗の度を強め、纖弱に流るゝものを生じた位であるが、繪畫に於いては前代繼續以外に、非宗教畫が發展し、大和繪が創められた。これも前代の特色たる所の同化を更らに強めたと云へば、それ迄であるが、同化以上獨創的の分子を含み、日本趣味を最もよく發揮した點で、藤初時代に優るものがある。尤もこれは繪畫が他の種類の美術より遲れて同化したとも考へられるが、同化、日本的といふ點では、最も優つてゐる。猶貴族佛教藝術である點や、淨土教藝術である點から來る特色、表現上の特色等は、前代と全く同様である。

獨創的の價値

之れを價値の方から考へても、最も日本化した繪畫、獨創的の分子を含んだ繪畫、即ち大和繪が最も秀でゝゐる。各時代を通じて日本美術の最も特色あり、價値あるものを問はれても、藤原末期から鎌倉時

54
63

代に至る大和繪は、桃山時代の障壁畫や江戸時代の浮世繪と共に擧げらるべきものである。而して遺物として源氏物語繪巻と伴大納言繪巻及び鳥獸戯畫は、各趣を異にした傑作である。又金戒光明寺の山越の彌陀の如きは、佛畫を自然と結合した好例であり、經巻口繪、扇面寫經の如きも、佛畫としてみるよりも風俗畫として見るべきもので、他の時代にない價値あるものである。

次に工藝美術は、空前の發達をなし、中尊寺は金色堂の裝飾、佛壇を始め、法具等これを代表し、分量に於いては比較すべくもないが、美術の遺品尠き東北に於ける寶庫として、美術史上十分な價値を持つてゐる。建築には遺物が尠いが、嚴島神社の設計は、建築と自然とを大膽に結合し、其の複雜な平面と輕快、優美な立面とは、他に類例なく、よく日本趣味を發揮したものである。其の當初の建築の亡びたのは遺憾であるが、再建もよく當初の趣を示し、同神社藏の經巻と共に、平氏美術の價値を物語つてゐる。又春日神社若

宮前の神樂殿の如きは、重要な建築ではないが、優美な流造の珍らしい例である。最後に彫刻に於いては、峰定寺の千手觀音、中尊寺の一字金輪、三千院の彌陀三尊等何れも優美を極めた遺物として價値がある。之れを要するに藤末時代の美術は、藤初時代の繼續であるが、繪畫の如く異つたものが發達し、又遺物にも變つたものがあり、其處に又多少の違つた價値を持つてゐるのである。

昭和二年九月十五日印刷
同　年九月廿日發行

日本美術史概説
第五冊「藤原時代」
定價金五十錢

不許複製

著作者兼發行者　東京市外青山北町七丁目番地　黑田鵬心

印刷者　東京市芝區愛宕町十五番地　一噌連

發行所　東京市外青山北町七丁目二番地　趣味普及會　電話青山七四三　振替東京三七七〇四

發賣所　東京市日本橋區室町三丁目十番地　日佛藝術社　電話日本橋三九二四番　振替東京七一三四九

發賣所　東京市日本橋區下槇町十番地　弘文社書店　振替東京三七六九番

（一噌印刷所印行）

54
63

黒田鵬心著

日本美術史概説

趣味普及會發行

定價各册金五拾錢
送料 二册迄十四錢 五册迄十八錢

既刊

第一册 序説及原始時代
第二册 飛鳥及白鳳時代
第三册 天平時代
第四册 弘仁時代

續刊

第六册 鎌倉時代
第七册 室町時代　第八册 桃山時代
第九册 江戸時代　第十册 明治・大正時代

昭和二年十一月發行

54
63

549
63

549
63